

候事に候一寸參上御見舞申上度候得共却御面倒も可被爲在先相控居候此品寔に粗末候得共御見舞申入候即呈上候御家臣へにも給候様願入候

一昨日押出仕仕候處女房面會桂宮へ兼々御願之通還幸年内之儀幾重にも御懇願之由尊公下官承知之義故分被命候由上臈文被見候

此事從大宮も改被仰越候由三條公へ委細一昨日と歟被申置候由に候池田中將桂宮御警衛厚念を盡し候由於御前厚御沙汰を奉趣に申出候旨於宮誠深御畏御禮被仰上候池田へも貴君小子之内より厚可申達同上臈文中に有之候

右尙尊公へも可申上答置候

一別紙ケ條は先日より三公へ申入置候尙又御勘考希入候一ケ條はいかなから在の儘書付置候儘に申上候  
若參拜に申も不苦候は、今夕明朝之中に申も明夕に申も可參入候御面

倒之程を差控候事に候也

十一月六日

忠能

岩倉公

御内披御答不相急候

(別紙) 一奥羽大名小名佐竹等之類云ふ之朝義遵奉無類之無疑徒は一同御賞功迄にも何

とか別御沙汰有之候如何

一備前侍從供奉以下篤實之様に見聞仕候少將位一階にも被下候如何哉

一同人還幸も定奉供奉被仰付候義とは存候得共此義は何れ共相願度由御道中連日面會度々被願居候

一源輔相公官位之事何卒先官計にも早々宣下之様幕下差支候義も有候は、大納言成共早々宣下候様御取計之事

之右此間より三公へ申入置候宜希入候

一字和島母大病に付早々一寸還國願昨日差出候御聞濟に相成候右は眞實之義にも候哉何ぞ仙臺邊之儀にも候哉心得に伺置度候

一同人西洋馬鹿毛之方  
二疋之中宜方之よし

拜領御直に被願候三公へ御相談之様申上置候御含宜様に希入候

一公董朝臣白川口總督凱旋に付一端御暇被下昨日發足に候然處當所御行在中之御事のへ何卒當地御奉公申上度内々三公へ被申願候處一端被仰付候事故先歸京自然年内にも還幸不被爲在候節は何か様とも被致再下有之候様被含居候由返答に付一應は西京へ參候得とも右之邊相舍居候様被頼候儘内々申上置候宜希上置候

八九 中山忠能書翰岩倉具視宛 明治元年十一月十日

理髮大巖略眞平御免

御順快恐悅尙御自愛專一存候

一和宮云々承候昨日は吹上被爲成前後混雜不得寛談如何相心得申候

一御昇進事三公へ申入置候間如何今日御書之通可申入置候

一慶喜一件心得相成畏入候如御命世評苦心仕候

一備前事昨日も三公へ催促候處下乗一件六かしき物官位は阿土へ一寸

申候へとも不同心歎に候まゝ延引併以思召被 宣下候はゝ尤可无子

細哉と被申居候今日又々催申候下乗之處右ゆへ何卒自貴君も御申込

希上候

一旅中之事御懇命畏入候宜希上置候

右荒々御受如此候也

十一

岩倉公

御内披

忠能

九〇 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年十一月十三日頃

御安全珍重存入候御不例如何御保養專一存候扱軍艦手に入候議横濱談判之都合も整かね實に心外切齒に不堪候爰に至り天下之爲を熟慮仕候處慶喜を被免征討せしむる却る奇計と相考候乍遺憾御決議可然と存候就而は小生考には慶喜は被仰付候義に決候上は朝廷より被仰付候共從德川願出候とも五十歩百歩之事とは存候得共木戸之見込退る相考候處又可なる所有之候様に存候第一は條理も相立德川對朝廷奉公之志相表れ奉安

宸襟候道にも相叶候間旁慶喜の爲にも天下に對し臣子之忠情相立從朝廷被許候も條理名義之相立候義に付是亦可然と存候猶御熟考伏奉仰候勿々要用而已言上仕度馳禿筆候猶拜上萬々可申陳候頓首

實 美

岩 公 閣 下

九一 岩倉具視書翰〔大久保利通宛〕 明治元年十一月十四日

昨夕勝出會一件つまり慶喜より出願之事に示談決定候尤都合能く調談之次第御安心可給候右に付出願書文面抔は今朝足下の談し候様申置候早々より出願と存候

今日三條へ申入各等午後同家集會決定有之候様申送り候其砌足下右願文下書御持參評席に御決し可給候其上速に表向夫々運ひに相成候様致度候

右早々如此候也

十一 十四

對

大久保殿

尙々全く足下周旋之力によりケ様運ひ付候事と實に感銘候此上よろしく願存候也

九二 伊地知壯之丞書翰

岩倉具視宛 明治元年十一月十四日

頓首頓首謹奉呈一札候寒威日々嚴肅罷成候得共 益御機嫌克被爲 入  
恐悅御儀奉存上候不相替内外御多端御高配之御事と奉存候會計方一條は  
小松に托し一書奉差上候間 御落掌被下候半其後相變儀無御座見込之次  
第は三岡の申説候得共其實同論之所如何可有御座哉と奉案候三岡も出府  
仕候付 御聞取被下候事と奉存候正三徳大兩卿の見込之次第 御聞取被  
遊度と申御事に度々拜謁仕愚見之程小松便に奉差上候二通外に一年分  
之出入を量るケ條之所愚見之次第別紙之通書認入高覽置候依而奉差上候  
間 御一覽被成置被下度一々ケ條通に參り兼候事も可有御座候得共大段  
之方向は定り居不申候而は無根之會計に御治定之期有之間敷會計は  
國家經論之業に唯金錢之損得勘定而已に有御座間敷奉存候乍不及奉命  
丈は微力を奉盡考に御座候先は形行御届奉申上度如斯御座候爲天下乍恐

御自愛御保護奉祈上候誠恐誠恐再拜

長十一月十四日

伊地知壯之丞

閣 下 左右

一府藩縣之惣檢地有之度候得共此涯難被調奉存候間時節を御見合御施行  
相成度事

一公領一年中之上納高諸運上相糺し 朝廷上之府縣年分之入用金海陸軍  
常備兵等之一年分之御用途を定る事

本文假令は一年分之御用金千五百萬兩に上納高運上銀取合千萬兩  
に及五百萬兩之不足に候は、右不足之分は 朝廷と府縣諸御役向之  
月給被下方之多寡に應し且大小名之高割に割掛御差足之事  
一臨時之御入用金之大數を量る事

本文貨幣局製造之餘潤并に商稅等より御宛行可成餘金有之候様仕年

々積金にいたし海陸軍興張之方に被差向度

一 大金を費す事柄は前年會計局に御示し會計官是を翌年之出入に算し不足之節は豫備之手當可有之事

一 差掛臨時之御用途有之御手當難被爲調折は歐羅同樣之振合に而利足附に而本朝中之富家が御借入手形御渡付之事

一 商税并に船税御取立の事

但船税は船之大小を以多少を定め商税之法則は和漢一定之例見當不申候間西洋各國之法則を糾し本朝之氣質に應し相堪候丈飽迄御熟評の上税銀之法則御取立相成度

一 會計局に一局を設け諸局府藩縣出納之勘定嚴重に點檢有之度事

但出納を司候局とは異り候様

一 諸局府縣に於るも金錢取扱之規則を定る事

但金錢出入之節其職掌に堪候者といへとも一己之計を以出納不仕様

一 諸藩高割に應し大小軍艦國役に備候様尤小藩は混合相備候事

本文諸藩相堪候程に寛々割付期年を定め嚴命下り度軍艦相備候場に右入用金三分二又は半減位に而金貨を以朝廷に致上納候様御座候は、本體堅實兵權一に歸し尾大不振之憂も無御座一段之御事と奉存候

一 諸侯 朝覲も三年に一度在京一二ヶ月位に御定め各藩守衛之兵も減少

其外何も相省け候様御仕掛の事

一 前件通年分之御用途不足之分は諸藩に御割掛之事候は、當分軍防局に高割を以上納之株は御免相成度

一 朝廷上之御役場が府縣之諸官可成少人數に而相辨候様

一 大小名上中下大夫之領地一往 朝廷に返獻改而 朝廷に是迄之通支配

被 仰付事

本文 朝廷に改而御預之上公論を以領地十分之一つ、返獻仕度右被

- 召上候土地は是迄通其藩に支配被仰付貢税而已上納仕候様  
一社寺御寄附高も一往 朝廷に返上由緒等御糺の上或は其儘被下附或は  
一 半減又は御取揚之事  
一 貨幣器械相立候は、金銀地金便利宜く御取入之道相立歐羅巴に致比較  
候 朝廷之金貨幣御鑄立の事  
一 付佐渡生野箕面其外金銀山の一層御手相附儀者勿論に候事  
一 門徒宗之類は致説得彼を年々致上納銀候様仕度  
一 右之外に  
一 朝廷諸局府縣に於る用る所之用紙を定る事  
一 印紙を製し諸局府縣に之公訴并に上下商賣貸借條約證書等取替之節は  
右印紙に非れば必ず御採用裁判無之筋に御定め之事  
但於一局右印紙を製し夫々の差向け相當之直成に賣らしめ候様歐  
羅巴各國に於るも同様之處置御座候由必ず其益も數十萬兩に可及候

又 政府之印紙を以飛脚書狀之便を助け其印紙を賣しむる事も追々  
可有之

一 朝鮮の使節被差立約條取結和親且商法を被始度事

九三 三條實美書翰「岩倉具視宛」 明治元年十一月十六日

寒雨鬱然候彌御清穆珍重存候御所勞如何に御坐候哉厚御自重奉祈候今  
日は濱殿行幸之處雨天にて折あしき事に御坐候扱内々申述候彼慶喜一  
條昨日徳川より願書差出候得共直様之御沙汰にも運かね候に付明日は  
必御返答之心得に御坐候然處機事追々漏泄軍務刑法辨事等には段々議  
論も沸騰之趣に承候勿論初より物議之生し候は覺悟之事に候得其實に  
無此上重大事件を唯議參四五輩にて密議致し宸斷として所置相成候て  
も大に人々不服不信之禍も相生候義に付此上は公然三等以上に御下問  
相成十分異論を盡させ候て之御決斷左右申候者も有之間敷と存候唯此

儘にて御英斷と而已打出候は第一政府中にも大不服を生し一和公平之道にも相背可申動もすれ此事は誰之姦策に出て某の周旋に成る杯無謂疑惑を生し甚しきに至候は内變を醸し此上内輪之禍を生候様之事に至候は實に神州之御爲にも如何と存候間衆論丈は相盡し候て御決斷願度ものと拙者には奉存候軍務大村へは木戸の熟話致候様申付候東京府北島香川等は尊君には不外義に付御内々御話し所存御尋被下候様奉願度存候此事難盡筆紙猶期拜眉候勿々不備

十一月十六日

實美

岩輔相公

九四 岩倉具視書翰「三條實美宛」 明治元年十一月十七日

一當日宿痾再發又々平臥御用繁之砌不堪恐懼存候へ共四五日不參願度候今日三等官以上被召寄慶喜出張云々御下問之趣格別之沸騰は無之と

存候へ共其得失利害は皇國之御爲に關係すること大なるを以て異論者納得候迄御趣意懇々御説諭有之度候聊之事に御趣意相違候得は毫厘千里之差を生し可申と存候萬無御如才御事には候得共病中益老婆心を生し不願失敬存意之儘申入候勿々如此候也

十一月十七日

具視

三條公閣下

九五 岩倉具視書翰「三條實美宛」 明治元年十一月廿二日

一兩日賤恙不工合に付御用繁之砌實に不堪恐縮候得共醫師之勸告に依り四五日間御面談之處御宥免願度候乍併大事件にて御直談拜承不仕は不相成儀は勿論何時にても光臨可給候扱至急之要件左に條陳仕候宜敷御評決を仰き候  
一還幸之事

御發輦前大宮敏宮懇々御沙汰之廉先朝御三周忌 皇后入内等も有之候に付一應還幸被仰出京攝之人心安堵爲致來春再度東京臨幸諸侯伯會同公議を以て大政之根軸被立候之は如何哉

一再度臨幸之節は太政官東京へ被移皇后宮も引續東京へ行啓被仰出候之如何哉

一還幸前に於て再度行幸に付御内儀向御造營取掛候様被仰出候は、東京之人心大に安堵可仕と存候

一奥羽越諸藩御處置之事

議參兩職熟議之上御處置寬嚴孰れにも御決定有之斷然決行相成度今日は百人百端之議論有之候は當然之勢にて人毎に説き得へからす戸毎に辨すへからす政府は動かさる事山の如く有之候は、政府の實權必被相行可申と存候

降伏之諸藩寬典に被處候儀に御決定に候は、政府は最早一點之猜疑を

不挾事を天下に明示候儀は氷雪之融釋するか如くに有之度候尤寬典に處せらるゝも其中に凜乎と皇威之可立もの自ら無之ては後來必恩に狂れ候者相生し可申と存候會津庄内之如きは條理上刑典に於て大罪は逃る可からざるは勿論に候得共其情實に於ては聊可恕之處無之にしも非ず候仙臺の如きは會津征討之勅命を蒙り乍ら却て會に黨與し奥羽諸侯の盟主と爲り官軍に抵抗し且參謀を殺し其罪は却て會より大なりと可申ものに候南部の如きも始終曖昧極り朝廷を輕蔑するの迹無之と難申又米澤は仙臺と同様なれとも早く降伏謝罪之上會津庄内等へ出兵致し聊勤王之實效相立候此等は其罪之輕重篤く御詮議相成度存候

一會計之事

此件は兼之議參各位も御配慮之通至重至大之急務は申迄も無之一日も早く其根軸相立不申候之は百事一步々々跌き候譯に起臥焦心苦慮此事に候議參各位も御如才無之とは萬々存候得共御互に不相讓反覆討論



屹度根軸相立候様御賢考偏に祈候幸に三岡東下致居候に付此時不失御評議之程懇願之事に候此根軸確立不致候ては天下之事は總て去り可申と存候

一 洋法醫師を御醫に御採用之事

臣病痾に平臥中熟慮候處如何に存付候ても心底に任かせざる者は病痾に有之候依之毎々建言候通至尊之御上に於ては尤厚御手當無之ては不相濟儀と存候條公初め議參各位之御心配に御所之舊習を一洗し折角洋法醫師を典藥察醫師に被仰付たるも猶依然と舊の如く漢法醫師而已に拜診被仰付候は何たる事に候哉臣屢之を論するも未た其舊習を全く除くこと能はず歎息此事に候抑今日は天下之英雄豪傑朝堂之上に雲集するに依り縱令百萬之強敵脚下より一時に起り候共決る所に非すと雖不時之邪氣萬々一にも至尊之御上を奉犯候様之儀有之候如何なる英雄豪傑も之を救ひ奉るの術を知らず拱手之外無之實に恐悚

戰慄之至に候醫師は病痾を退治す可きの將軍に有之候間兼御醫には三折之良醫を仰付られ不申は不相叶と存候何卒議參各位此上一層御盡力にて漢洋兩醫共同様に日々拜診被仰付候様御配慮之程千祈萬禱致候

右病間書綴り頗る贅議に涉り恐懼至極に候得共螻蟻之微衷難默止御宥恕可給候也

十一月廿二日

具 視

三 條 公

九六 岩倉具視意見書

明治元年十一月廿二日

一 還幸之事

附

一大宮 敏宮兼御懇に 御沙汰 先朝御三年女御入内立后大嘗會 等御目的外に小事件に有

之事

一前件に附ては一應 還幸京攝人心安堵せしめ來年春度之内再び東京  
行幸大に諸侯伯以下參會慶賀を奉らしめ并に太平を被爲祝而して大  
に 天下之公論を定められ候ては如何之事

一此度

還幸に付るは東京留守之任實に重事と存候間宜御任撰有之度候事

一再ひ

行幸之砌太政官 御親隨は勿論今日既に兩端に出る之弊あり 后宮におゐても御同様

有之候るは如何之事

一還幸前に於る再び

行幸云々を以

后宮御殿御造營取掛候様被

仰付置候は、東京人心は大に安するも  
のあらん歎と存候事

一誠に僭越之儀如何にも恐懼此事に候得共政府在職一同眞實同心に  
降伏藩御所置寛猛孰れも屹度御決定在之度者也未だ下之議事も不興  
且兵馬倉卒に起り如此速に平定之今時百人百端之議論交々沸騰は當  
然之勢に候得共人毎に説き得へからす戸毎に辨するを得す斷として  
行ふへき儀は山之如く不動様返す、同心戮力基礎培植議參懇談肺  
肝吐露一點内外無之政府一定候様有之候は、必政府之實權も被相行  
可申哉と愚考仕候

附 國內平定速なるを旨とし亦衆庶力を一本に盡し偏に海外へ御手  
を被爲伸候様御目的被爲立候は、所謂 皇國御維持之場に可到哉  
と愚考仕候事

一徳川今後之御取扱取捨兩端意を被用之上におゐて全國之爲大に得  
失利害あるへき歎

一降伏諸藩寛典に被所候儀にも御決定候は、總之儀政府之情にお

ひては氷雪之解くるか如く相成候様有之候は、如何哉之事  
總而寛典といへとも一つ 朝威之立つもの無之は必恩に狎れ安  
に流るゝ者有へし聞く會津庄内之如きは刑典におゐて元より明了  
然りと雖所謂醇粹之賊と云へからん歟南部之如き始終曖昧極り候  
風聞も有之若し實事に候得は嚴罰に被所  
皇國士道益振起候様可相成一端とも存候事

一 今度賞罰之事

第一復古之臣被賞之事

第二戦功之將士并軍務官在職の輩被賞之事

第三降伏大小名御所置之事

一 奥羽越民政之事

奥羽元より大國從來之御領も不少上今度册封之分亦百萬石に近か  
らん實に一日不可忽儀に付斷然御決定公卿諸侯議定之内壹人參與

にて壹人民政之儀御委任巡撫旁被命速に發途被 仰付候は如何  
可有之哉萬一人無之とて空く時日を送り當年遂に御手を不被爲  
降候様之儀には得失如何計之事歟と頗る過慮仕候間しかし當時  
奥羽の凱旋候參謀隊長之内には随分其人あらんか且現場之次第承  
知之儀にも候得は亦便なるものあらんか彼是愚考仕居候尙又會計  
亦も一兩人同行金銀銅鐵山取調被

仰付候は、

御國益大に興るものあらんかと亦衆論承り申述候事

一 局外中立之事

一 箱館御所置最も大事に付議參御互に無間斷格別盡力寸刻も早く迅然  
恢復いたし度候事

一 會計之事兼各各位議論之通至重大之儀は申迄無之實に至急之要務  
幸に三岡東下此時を不可失東西同一基礎相立候様懇願仕候尤も各位

御如才無之事に候得とも御互に決して不相讓反覆討論屹度根脚取締  
出來不仕候は天下之事も去り可申程に起臥焦心過慮罷在候間猶御  
賢考偏に歎願候

一 今度折角強る舊弊を被爲破洋學醫師被召出候處猶依然として如舊漢  
法醫而已拜 診は何たる事にて候哉 臣屢建言すといへとも未だ不被  
行今日に當り候ては英雄豪傑  
朝廷に雲集假令百萬之強敵足下に起候共却る恐るゝ處に非ず然るに  
不時之寒暖邪氣億萬一  
玉體に被爲感候儀有之候は實に恐懼措く處を不知如何なる英傑と  
いへとも拱手之外無之儀なり醫師亦亞將之職務議參一同今日に當り  
大に力を被盡候る舊習を除き漢洋並行われ同様拜 診被 仰付候様  
施行可有之深く願存候事  
一 遠參轉封諸藩之儀誠意を被用候は、孰れに致し候ても毫厘千里之遠

無之哉と愚考仕候事

一 各國公使參

内無異相濟候事萬々祈望候事

右病間相綴傍觀贅議に涉り甚恐懼至極に候得共螻蟻之微衷難默止候間  
御宥免可給候也

十一月廿二日

具 視

九七 中山忠能書翰 岩倉具視宛 明治元年十一月廿三日

追ふ結髪中御使爲御氣毒恐入候也

御細書畏拜承仕候此程は存外之御不沙汰御旅中一入御困と恐察甚た御按  
し申上候處追々御快方之旨先以恐悅聊安心仕候併何卒々々御大切に御用  
心之程所希候一兩日には御參之由吳々も御自愛に一日も御早く御出仕  
に候は、幸甚無此上と存候

一 還幸云云之事御内書心得に相成畏入候尤所願候

御三回

入内立后

天祀是は何れ明年十一月之義と存候心付候まゝ打明言上候

御廻之御書付之事敬承仕候

一 小子給物事御厚情千萬々々畏入候自然仰之通御取計も給候は、寔以安心深々畏入候

一 札之儀内々御家臣迄家來を以御内談申上恐入候會計を四五日之内返答候よしに候事により候は、尙宜希上候實は近頃は何かも札ゆへ札を持下り候處當地にては不受其位に參り不申大に當惑仕候色々御面倒恐入候

一 和宮一件早々帥へ申入帥を被申入候由に候處其節などは色々の説も有之候へとも只今兎角思召候てもとんと不御宜ゆへ御氷解候間此上は御

爲御宜様御世話御頼被進候よし御返答と申事に候委細は拜上に申上候此一件御迷惑寔以御察申上候愚存の及候丈は申置候事に候  
右荒々御受申入候萬々拜上可申伺候御出仕之程に相伺實に、大慶々々仕候也

十一 廿三

過日御船之義御様子相考候處少々御掛念之義相伺大に心配仕合候拜上ならては難分其上申上候也

岩 倉 公

忠 能

拜答内々

九八 三條實美書翰 [岩倉具視宛] 明治元年十二月

明日は是非參

内萬々拜上可申陳候

還幸之一條土州初集會彌決議仕候

留主 德大寺 閑叟被召寄之事

但德大寺著御引渡迄尊卿御居殘之事

小子は

主尊に陪從西歸之事

右被仰出候に付明春二月を以再巡之御沙汰同時御布令此儀明日は必御互參朝之上神速御沙汰候事

一今晚木戸の訪問候事は如何可仕哉勝房參上之由定之今晚は御延引と存候猶伺度候

一慶喜出張之願御沙汰に難被及に付民部大輔出張云々之一條實に徳川家に對し勝房等前に御互より内々諷諭之次第も有之模様之段實以不都合は申迄なく先方之引請如何哉と深苦心仕候小子丈之心は勝へ申論候得共定之行届不申不服と相察候何卒僕の不及所は御補助にて御

諭告被成下候様奉願度候勿々頓首

岩 倉 殿

實 美

九九 大橋慎上書岩倉具視宛

明治元年十二月廿四日

恐懼謹白

今日平松殿へ呈書の義有之序ながら存し出し候儘言上仕置候尙近々參殿拜謁の節萬々言上可仕候得共豫め被聽食置度奉存候余の義に亦も無御座候宇田栗園の如きは好吏跋扈の際に當り正義者を助け候事も不鮮實に稀れなる勤王家に御座候殿下の知ろし召す所也然るに慎等は 叡感を戴き天祿を戴き候得共慎等を助け今日に至らしめたる栗園の類は何の御沙汰もなく岩倉殿の食客同様の體にては少し慎等安んずる事能はさる所あり

朝廷に於て軍曹を廢せられぬ事に候得は栗園の類も軍曹に被仰付夫を

輔相公の輔翼にても執事にても參與にても議定にても被 召遣度者と奉  
存候山中靜逸と雖亦同様藤井九成の類も亦然りと奉存候俯て妻子を養ふ  
に足り仰て父母に事へ以て 天朝に盡せるの道を立て賜はり此本ありて  
後四方へ被 召遣可然奉存候進て當路にありと雖退けは土川村の藪醫修  
學寺村の小儒となりては余り 御一新に不似と奉存候此段も宜敷 御配  
慮置き奉願度奉存候

一近來賄賂流行の説甚し慎惟るに當路の者音物贈答一切禁止被 仰付可  
然奉存候公然禁止無之候は各私説を唱へ正不正取捨の積りにて往々  
不正に陥るの勢は天下必然の事に御座候公然禁するに如かずと奉存候  
事

一高野山の義は何分今一度相方とも一新の 御沙汰に相成り寺院掛り弁  
事にても出張鎮定可然奉存候事

亂筆縦横不堪恐縮奉存候得共右思之儘言上仕置度如斯御座候誠惶謹

白

十二月廿四日

慎

三  
廣興

岩老公殿下

呈

一〇〇 岩倉具視書翰 [中山忠能等宛] 明治元年十二月廿九日

中宮

后宮之議論各位におゐても御承知之通と存候間來陽寛々御相談可申候且  
車寄昇降送迎之事是も御政事始御相談候ても宜敷哉今日は決定御布告に  
相成候哉御評議次第別に所存は無之候差急的用而已早々如此候也

十二月廿九日

具 視

中山殿

德大寺卿同意

德大寺殿

承候兩條共明春政治始御相談被決可然哉に存候

岩倉具視關係文書第四 (明治元年十二月)

二百三

中御門殿 同上

一〇一 松平慶永書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年十二月廿九日

上包 越前建白 皇后稱呼之儀 一紙

議定送迎之儀 一紙

是迄之御規則 立后之後被稱 中宮候得共 御一新別て衆人能知り易くして格別 尊崇し且萬國にても尊稱を極むる號は 皇后にしくはなし以來 中宮の 御稱呼を被爲止 皇后の 御稱呼相成候儀御至當と奉存候事

慶 永

當分假規則

一 輔相議定參仕之節御玄關番一人御敷臺に拜伏給仕二人御出迎御跡より相隨ひ議參詰之給仕え案内可致事

但御退出之節右同様相送可申事

一 參與以下在官之公卿諸侯參仕之節不及送迎候事

一 諸侯參上之節家來之者出迎且用聞として猥に 御玄關え罷出或は御廊下向通行可爲禁止事

但十五歳以下不得止向は重臣之者一人休息所前廊下迄附添直に重臣詰所え退居用辨候儀不苦候事

奉拜呈候昨日は於 宮中得拜顔大慶爾後御安全珍重奉存候抑昨日は 女御入 内誠に以御同意 臣子之安堵恐悦は申迄もなくうれしく奉存候此上は 皇胤 御繁榮と日夜奉拜祈候乍愚只々 先帝 在御にて 叡覽被爲在候は、嘸 御喜色之御事と奉存候却說此頃嗟峨龜石八十之老人作り候竹鶴を到來候餘り如何敷物にて奉恐入候得共御内々差上度候間 閣下迄差出候不苦候は、 御傳獻奉希候扱又於東京別紙之通被 仰出候由故此宮中に於るも假なりとも 御規則被相立御布令有之度候又云別紙愚存一



通差上申候間何卒御賢考希上候書外面上に譲り貴答奉辭候也頓首

十二月廿九日

慶永

岩倉公閣下

演説之概略書取を以る申上候様被仰付候に付申上候

昨日被仰下候趣大藏大輔奉謹承候外夷を見る尙古之漢土之如しとの  
覽乍恐奉感佩候不肖之大藏大輔乏を議定に承候に付外夷へ之御布告に  
御諱御璽を被爲載候末へ加判仕候様蒙命恐汗之至り奉存候萬世皇國之  
基礎を被爲建候御大事愚衷可默止義に無御座に付差向奉申上候今般大  
政更始之折柄外夷も刮目罷在候處諸侯列名纔に五藩而已にて夫も多くは  
隱居又は世子等に候得は只今に至るは外夷も國情通知之事故全く天下之  
會議を聞召候之御處置とは不奉伺御國體も乍恐御手薄に可奉存哉  
深憂に不堪奉存候

御告文之内列藩會議之上と被爲在候通追々列藩も上京可仕候間仰願くは  
會議を被爲待篤と公議之上御布告相成候共敢不遲哉に奉存候夫迄之處  
迫る外夷より不伺出様には如何共被成方可有御座哉何分勅使御下向一  
度降命有之候上は直に世界之通法を以て都下にミニストル指置候儀可奉  
願且是より應接は誰人に可仕哉參朝も仕度天顔も奉拜度抔申出候は  
甚た御煩布儀と奉存候吳々當分之處は兎も角も御論し置相成尙厚天下  
之議を被爲盡候様幾重にも奉願度今日此處に御遺憾無之様御盡し無御座  
候は後日之大害難測至重至大之儀恐懼之餘り不憚忌諱議定之廉を以る  
右之趣賤臣兩人を以る奉申上候

酒井十之丞

毛受鹿之介

御座候處先日來御所勞に御參 朝も不被爲在由いか體之御容  
子に御座候哉無覺束奉存候扱過五日丸太町之妄舉者實に思も不寄事に  
於横井は甚可憐事に御座候事御一新之世箇様之義有之候は  
朝廷之御威光にも相拘り別不相濟事に御座候就ては申上も愚ながら  
籍者之確證顯然之上は嚴律に被相行且將來之所屹度御布告等有之度事  
かと奉愚考候將昨日内獻物之包御問合仕候處明日持參にて差出候様被命  
承仕候然處明日は休日且いまだ  
尊臺にも御參被爲在間敷左すれは他日御參之節差出候様被仰付度奉存候  
間可然日限被仰聞候様偏に奉願候右申上度如此御座候頓首謹言

# 明治二年

## 一 毛利元德書翰「岩倉具視宛」 明治二年正月十日

春寒之節御座候處先日來御所勞に御參 朝も不被爲在由いか體之御容  
子に御座候哉無覺束奉存候扱過五日丸太町之妄舉者實に思も不寄事に  
於横井は甚可憐事に御座候事御一新之世箇様之義有之候は  
朝廷之御威光にも相拘り別不相濟事に御座候就ては申上も愚ながら  
籍者之確證顯然之上は嚴律に被相行且將來之所屹度御布告等有之度事  
かと奉愚考候將昨日内獻物之包御問合仕候處明日持參にて差出候様被命  
承仕候然處明日は休日且いまだ  
尊臺にも御參被爲在間敷左すれは他日御參之節差出候様被仰付度奉存候  
間可然日限被仰聞候様偏に奉願候右申上度如此御座候頓首謹言

睦月十日

廣 封

輔相公閣下

二白當時御壹人之御事に付別々御保護被爲在度奉專禱候稽首

二 岩倉具視書翰

〔大久保利通宛〕 明治二年正月十四日

前略今日も不參令恐怖候得とも兎角不快不任心底遺憾此事に候併今朝議定諸卿追々示談能く合議來る十七日より夜白勉勵決定候事に候今度は屹渡實行相立ち各分課眞に引受百事舉り候様冀望の事に候各位始に素より不待論事に候得共一段御盡力二月下旬にも 御發輦相成候様と只管存候事に候扱亦舊藩士大山格之助是非軍務官へとの事同官知事始と判事一同々申立に付内々御様子承り度候とふか同人事明日頃々歸國の旨に候彌被 召出不苦候は、早々内々御留置可給候仍々御相談迄如此候也

正 十四

對

大久保參與殿

三 岩倉具視書翰

〔大久保利通宛〕 明治二年正月廿六日

尙々浪士所置三人の見込如何之事哉一向不相分候得共此事は寛猛斷然一に御決し無之候は追々此害増長天下の事不可救に可立至と存候小子見込癸丑有志云々而して後來諸府藩縣御取締り最大之事と存候得とも是も今日には至急の間に合かね候か兎角狼狽無之様根軸始末附度ものには候早々以上

前略只今條公方出頭候處從大坂判事急書脱浪士并草莽徒五十人計下坂外國人闇殺亦商館燒討之企有之同所に小松後藤大隈示談手當最中之由附は於京都も右之徒暴發紛々の由告來り右書狀は條公々只今廣澤は回達早々足下副島等へ傳達之筈に候但草莽所置方見込小後大等々足下は差出候旨御到來候は、早々條公へ御差出し可給候仍早々如此候也

正月廿六日

對

參與大久保殿

四 伊達宗城書翰

〔岩倉具視宛〕 明治二年正月廿六日

愈御清安奉賀候扱過刻別封到來愕然焦慮之至未發に至急御處置有之度  
岩倉卿へは御廻達奉希候大久保も來書差出御覽候半明日披見申度鹿島  
又之丞之連類十津川邊之者歟不可解草々頓首

正月廿六

宗 城

御直披

五 岩倉具視書翰

〔大久保利通宛〕 明治二年正月廿八日

昨夜書狀一見條公より内示秘事何時にても被仰付候得共賞典之事百萬石  
を以て云々今日に御決定有之度右次第共小子存慮は條公に申入置候亦副

島建言一同承知の一紙是を御見合御決定有之度候小子は不參候得共必御  
治定相成候事と存候左候へは明日にも秘云々可被仰出存候

但此賞典のこと重事に付ては神山門脇等にも御示談可然亦土方江藤上  
京のこと同席被仰付候は如何にや其上三等官吏にても御内々下問可有  
之かの事

右等足下より條公へ御申入御内談可給候秘の事御申入に不及小子より申  
入候土方江藤朝來面會候兩人東京之話例之議事所に御一同御列座御聞  
に候は、一入可然存候箱館の事も可分明と存候草々不備

正 廿八

對

大久保殿内啓

木戸松浦書狀正に入手松浦事はえぞ云々も有之候間願候旨如何と存候  
嫌疑されたる事にも有之間敷御賢考御返事可給候

且申候佐久間段々内話至極都合宜く同人急度引受心配致し候旨に候

追々談合之次第も有之必々半月計には貫通可致左候へは京攝間は無事  
と存候夫迄之所平穩祈り候事に候今日は右之次第に付軍曹の者來會之  
筈無據令不參候只々本文賞之義速に御決定御盡力頼存候早々如此候也

六 岩倉具視書翰「大久保利通宛」 明治二年正月廿八日

一見候

賞典の事に付會計云々以ての外の異論近比如何之至極に候先時三條より  
別紙返書にも愚意申遣し候事に候抑軍務の御振向百萬石は奥羽越削地に  
不係從來天領御歳入いかんと尋問候所慥成所之百萬石是は三つ物成りと  
御見込候は、十分と申候依之至急之軍務費に付三ヶ一と申談し木戸にも  
同席其跡同人引受書附迄取替し候約定に候然るを今日に至り中御の話  
全く無謂事に候明日は斷然御内決議條公可申談と存候浮浪の事十日半月  
には必打合附可申事と存候内話之義承引に相成候事實に重疊忝存候早々

以上

正 廿八

大久保殿 報

後藤書狀正に一見候也

對

七 岩倉具視書翰「島津久光宛」 明治二年正月晦日

殘寒之候先以聖上倍御機嫌能被爲涉御同然奉恐悅候老臺愈御久痾漸々御  
復常之由爲朝野幸甚此事候小生東京滯府中風と病患に罹り平生に不立戻  
困苦罷在候乍併元より膏盲に入候儀には無之日々勤仕乍不及盡精力候此  
段御降慮是祈候抑東北平定萬御都合克一旦還幸被爲在候就之は今日之盛  
事貴藩長州等積年誠忠之貫徹天下之公論敢之辨するを不待候今般宸斷を  
以勅使被差立候儀深き叡慮被爲在候御事臣等に於ても奉感泣候御闔藩之  
面目不過之御満足之程致遙察候右に付大久保一藏被差添歸國被仰附候間

萬縷口頭に相托し申候御承知可給候實に前途守成之基礎速に不相立候  
は内憂外患不可測夜白杞憂罷在候條御病痾御差抑へ早々御登京奉渴望候  
巨細筆頭之盡す所に無之大久保より御聞取希望候右爲御音信草略拜呈如  
此候也

二仲賢息御滯京中は格別御懇命に預り辱存候將亦毎々御國産御惠投萬  
謝申陳候此品粗薄ながら聊鄙意を表候まで進呈御笑留可給候也

正月晦日

具 視

島津中將殿

八 大橋慎書翰

〔岩倉具視宛〕 明治二年正月晦日

謹 白

昨夜も難有奉存候拜別河田佐久馬へ参り候處余之義にあらず軍務官一洗  
且浮浪士を精練し屹度 朝廷の兵權を培養するの志懇々縷々議論承り則

殿下御同意御奮發感激喜躍之旨承り候就るは軍曹中之人物上等之分爲聞  
候様承知仕り則只今<sup>上中</sup>△二等之分分ち昨日呈 覽之書と同様に仕り爲  
見置申候仍る此旨言上仕置候事

一過日拜承仕候通り明朔日早曉には鷺尾卿御參殿に相成候様尊命相通し  
置候に付是非く御面會奉願候事

右爲念言上仕置候稽首く

正月盡日

大橋 慎

岩 公 殿 下

九 岩倉具視書翰

〔嵯峨實愛宛〕 明治二年二月三日

御懇書拜誦先以至尊倍御機嫌克被爲涉御互に奉恐悅候尊官御東著後御清  
適不相變御勉務之段奉遙賀候小生爾來久痾追日快方に有之候得共元來一  
朝一夕之病性にも無之哉不時相惱申候就るは兼る懇願之末辭表差出候處

情實被聞食候上輔相被免候然る處尊示之御書厚く御配慮被成下殊に過當  
之御委託御蘭情之御好意不堪感佩素より菲才を不論此際紛碎仕候心事毫  
も無他念次第に付依舊議定席へ日々勤仕百務及熟議候次第却而實事は相  
舉候半と存候此段御降念可被下候

御再幸も必ず期限通に相運可申哉是亦御安心可給候就るは御地之御都合  
御疎意は無之筈に候得共精々御盡力頼存候

右は御報而已乍失敬所勞中代筆不盡意御推讀奉祈候早々頓首

二月三日

具 視

正親町三條殿

一〇 岩倉具視書翰〔木戸孝允宛〕 明治二年二月三日

朶雲拜披愈御安全御奉職引續御苦慮之段欣然候分袖後東京人心至る平穩  
偏に諸賢御盡力之所致と感銘此事に候當地も上下無事當春は格別之陽氣

を催候此機に乘し百務丕新之實蹟相立不申るは不相濟折角三條卿歸著後  
戮力及熟議次第に御座候小子賤恙漸次快方には候得共全く根治之場にも  
至り兼尙宿願之次第も有之旁辭表差出候處無據情實被聞食候上輔相被免  
候雖然此際決る淪安苟且候儀は無之日々議定席へ出仕候て菲才乍ら不相  
變執掌致候に付却る實事は相舉候半と存候間御降意是祈候御來示には餘  
程御勞念被下御厚意之段不堪感佩候素より前條之次第毫も無他事儀に候  
間可然御聞取可給候

一藩政論も遂に先般四藩建白有之是亦足下積年誠忠之所貫實に感伏候此  
件將來朝權維持之大關係に而既に斯く相運候上は朝廷眞實公明之御所  
置有之度尤結局は東京に於て侯伯大會議之上何分可被仰出其中各藩一  
般之方向も相立候半と存候前般去春以來内外之情實も有之格別御苦慮  
有之候儀に付右様被相行定る御安神御満足之段致遠察候

右は御報而已乍失敬所勞中代筆不盡意御推讀是祈候也草々頓首

二月三日

具 視

木 戸 殿

一一 岩倉具視書翰〔大久保利通宛〕 明治二年二月五日

尙々末筆候得共中將殿修理大夫殿より小松始宜敷御傳聲頼存候尙亦申  
入置候愚意ケ條出來次第可差出候元より試に書付候而已可取者にも無  
之候得共萬々一御参考一端にも相成候は、忝存候事也今夕下坂候は、  
肥後藩事伊丹御聞合可給候吳々頼入置候也

昨夜は御苦勞併高論感銘殊に一事大に辨開爲天下幸甚何事か之にしかん  
と欣然候扱今度は 勅使爲差添西下被 仰付近比大義令遠察候乍去於  
御前直に御沙汰之通深厚 思召被爲立候御次第折角  
宸意之御旨趣速に御貫通之様偏に盡力有之度素り申迄も無之事に候得共  
爲天下返す、申入候此品如何なから餞別印迄に進入候仍る早々如此候

也

二月五日

參與大久保殿

對

不侍貴答

一二 廣澤眞臣書翰〔岩倉具視宛〕 明治二年二月十三日

再陳榎村半九郎下坂如何可被仰付哉候得共同人暫時滯坂に其地位  
と申一府諸官手揃之中押出し御用難相辨却る諸有司之氣分に觸れ  
寸益なくして害には相成り申間敷哉と奉存候素方 思食之處尙も可  
被爲在候得共心附之儘言上仕置候謹言

益御機嫌克被遊御滯坂奉恐悅候此内被 仰聞候京都府に追々施政之書  
類別紙附置之通差送申候府縣大綱規則書は少々半途に有之此度間に相不  
申其旨趣は



第一

御誓文を目的とし政體に法り追々之 御沙汰筋宜相守第二勤仕之面々等級上下を不論御爲筋は無腹臆申試總而懇切相補助勉勵して庶務凝滯なきを要す第三萬民撫恤の 聖旨を奉體し總而舊弊を一洗し教化を敦くし大體不明を繁大體不明するを要す第四地力を盡し生産を富殖し人民をして職業を勉勵なさしむるを要す第五下情を常に詳察し敢る濫賞罰なきを戒む第六救凶手當第七租稅收納方其他歳入を會計官に二字不明上納し又は其府縣賞費引當之額又は臨時大金之費用は行政官に窺出免許を請可取掛又は歳入を私有するを嚴禁杯之條目に於大體其府縣私權を不奮大事件は皆決を行政官に取ると申様なる心得に候得は一本萬枝一氣脈に出全面平均之良政被相行則ち諸官諸有司同心戮力一定不拔之御基礎相立譯歟と奉存候官府縣共銘々區々之政治を施し只一面を見て愉快を極め候様には會計も諸政も相整都は有御座間布哉に奉存候右大略言上仕度如此御座候敬白

二月十三日正午

兵

助  
頓首拜

岩倉殿閣下

一三 岩倉具視書翰「橘壹岐苑」明治二年二月廿一日

未得拜話候所彌御靜養之筈欣然候然は積年來御閑散中御先見之書類逐閱見敬服之至に候然るに御病痾之趣に付は廟堂上御勤仕も御困難之由遺憾此事に候小生義も近況心疾相發し此頃閑靜之地に於數旬之休暇を乞養生之心得に候就は卒爾之申條如何と懸念候得共足下若御上京も候御保養出來候義に候は、早々上程被成候様只管冀望候小生不才素り不待論義に於今日之寵職を汚し居候事汗顔之至に候得共兵馬倉卒之際行懸之次第不得止勤仕罷在候條只々苦慮致し候のみ御平定に付は過失計逐日と相重り後悔慙愧之至殊に今度御再幸諸藩を始め大會不出百日就中前途之其基礎如何可有之もの哉唯茫乎とし而不知所爲真に途方に暮居候隨は

足下之先見實に感銘之次第不少多年憂國之赤心勿論御傍觀は無之筈旁幸に小子を被助反覆教諭給候は、小子雖愚昧聊爲國家一助にも可相成か亦足下之至誠も或は貫徹可致哉と思慮不顧前後迅速上京之義強ふ令懇祈候此旨宜敷諒察可給候仍内々申入候以上

二月廿一日

具 視

橘 壹岐殿

追啓山河懸隔之地にも無之候得は元々自身訪問可致候所座しなから名士を屈致せんと欲する條失敬多罪海容所希に候早々以上

一四 嵯峨實愛書翰「岩倉具視宛」 明治二年二月廿二日

本月九日之尊書今廿二日酒井臣が相達薫誦仕候如貴命春寒退兼候處聖上御機嫌能被爲沙真に何之御申分も不被爲在由委細示給實に難有儀に奉安喜候次閣下御安泰恐悦存候併少々つゝ御不例之由拜承甚以奉案勞候

寔に御大事之御時節早々御加養御清快而已奉專禱候御頭痛にゐは一入御出仕等御困と奉存候御不闕には無之共何分此上御輔佐奉祈候二十日計御休暇御願之旨御尤に奉存候其内精々御療治奉祈候

一 當地先々鎮靜に御坐候間御降心可給候東久以下餘程勉力一同異議も無之戮力同心罷在如小生も其尾に相從勤仕罷在候此段御放念可給候箱館未定且奥羽轉封之徒領民愁訴等追々有之且市中強盜杯も時々有之候而是には心配仕候只 御再幸を奉渴望候一日三秋と奉待候追々御運ひも被爲付候由恐悦奉存候宇和島後藤も下着專精勤に御座候

一 輔相被辭候義に付ゐは聊謬傳も有之苦心情申上恐入候段々拜承安心仕候御書之旨東久初へも申傳候

一 木戸西上之義も段々取急き拜承候處便船無之其上會降伏人之儀に付取扱掛候御用も有之候間彼是延日何れ廿六七日には出帆西上候此段御承知願入候

一天下の事は是より初り候際故御勉勵之旨實に 皇國御爲恐賀仕候  
一三月上旬には盟て 御發輦廿五日迄に御着廿五日より四月二十日中大  
議御基礎被定四月廿一日を御下向以下御見込一々威服仕候猶東久申談  
尙又拜答可申上候高案之趣は至極御同意奉存候猶不遠御報可申上候御  
下坂之期微細御示感激仕候萬々跡より可申上候  
一御入内萬事 御氣色麗敷由難有奉存候  
一横井事件御心配と奉存候追々嚴重御取締り出來候由拜承候右暗殺下手  
人御處置いまだ不被爲有候哉刑典之義は如小生一向不案内何共難申事  
に御座候へ共心付候儘尊公迄極密申上候不當候は、御聞捨可給候國家  
顯要之重職たる人を私見を以斬殺候段固刑戮を不被免は論なし然るに  
當時人情を察し候に右私見の論たるは海内猶不少哉と存候然るに今般  
唯嚴重之刑に處せられ候計には心待違見込違の徒彌服し申間敷却る  
異論を生し可申と存候彼輩にも私怨を以て致し候譯にも無之畢竟は見

込違なから猶憂國之情を起り候筋にも有之候間彼罪人等へ今日世界形  
勢 皇國時勢能く御示諭被成下此後心得違無之様世間へも相聞へ候様  
被仰聞實に今日之勢斯なくてはすまぬぞと被諭候上被加刑戮罪各揭示  
且以後不心得無之様相響き候様被示候は、罪人も閉目死に可就又後來  
の激徒も實に見込違に法を犯し候は不相成と眞服目的を改め可申  
大に人心に關係致し可申哉と存候何れにも刑戮は不被赦は勿論只々以  
後人心服従之一端にもと存候事に御座候是等は尤御考慮申迄も無之候  
へ共一向御地御様子も不相分候間心付候儘申上候前條之通り被行候は  
、御取締嚴重かも却る人心服し候は以後自分心得違之輩も減し可申哉  
と存候事に御座候萬一御同心にも候は、可然希候  
一大隈早々御下し奉祈候貨幣取調へ付次第御下し相待申候御下坂之旨御  
苦勞奉存候

一尾州議定可被仰付旨恐悦存候因州同上既に被 仰付候旨拜承候藝州參

與被 仰付候旨拜承候右に付るは聊愚存申上候藝州には一昨年十二月御一新前舉國定論勤王盡忠確乎上京有之十二月八日在 朝九日御新之間御存知之通り昨年来脚疾且性質も委詳不存申候へ共平常瑣々御用には如何可有之哉候へ共不可奪之膽力は必可有之當時専ら御用ひは才力之人物而已故中には德望且才略は乏しく共如藝州不動之器も被用候は、可然哉と奉存候有馬も議定被 仰付候哉に承候備前も兼々被 仰付も有之候義藝州參與に而は聊遺憾哉に奉存候素を此見込杯は一通り不被行事に御座候へ共愚存之儘申上候

一 厩橋大和守も土地人民返上論之由人物も識量可有之哉と存候小生二度計識面と申位ながら世上評判も宜此義は木戸にも内談候處同意に御座候當時御登用悉西國藩計故厩橋一人に而も東國に而被用候は、東北人心にも關係可然と存候

一 自餘具に被示下一々拜承仕候時々越阿兩卿を記録被差下事情相通し都

合能御座候

一如小生昨冬當地在勤被 仰付出府當土之形勢見聞仕大に固陋之僻習を覺り候條々不少實に今日に而は政化を被布候も又萬國御交際も當土之如き四通八達廣大便利之地ならでは難相成狭少之眼も少しは開け申候に付るも御再臨奉祈上候三月九日十日頃

御發輦だと申て市中よほど安悦奉待候勢に御座候

一 薩西郷等も昨年歸國後いかゞ相成候哉今般被 召候傳由承仕候に付るは定る 思召も可被爲有と奉存候右等は多年舊幕の嫌疑を不憚東西奔馳賊藩の毒手を不避南北に出沒致し専ら國兵を鼓舞致し彼國兵卒在京致し居候へはこそ幕吏 朝廷を聊相憚り終に今日御盛業を被開候段偏に彼輩之忠力と存候復古之功臣に御座候譬へ本人は望無之共厚御登用有之度奉存候前文申上候藝州の如きも猶其類に而御一新の今日に至り御奉公はせねばすまぬ筋に御座候ならぬ所を不憚相勤候忠誠實に御見

分被下度奉存候就るは辻將曹如きも甚不被堪事に御座候折を以て再勤被仰付候て可然哉と奉存候右等甚敷直言も相交り恐々懼々候へ共愚存有之儘申上候甚不敵越樽等は御海恕奉願上候先は御細章御請旁如此御座候勿々恐惶謹言

二月廿二日五字

實 愛

岩倉亞相明公

再啓吳々も御不例中實に精細之御書感銘拜見仕候一々御請可申上之  
處三條家來明朝出立心急き荒々申上候返々本文之趣不省忌憚申上候  
不惡御聞取願入候猶又時候も不同折角御用心精々御加養四月には必  
御東下奉待候 且近來眼氣甚あしく亂書御斷申上候

(別紙) 内々御請

庄内之儀に付酒井若州僕を以御示承存候過日一應申立之節附紙之通りに

る難被行何分附紙之趣も其理有之候故其分に致し候得共猶又御示之旨相  
含可致愚考候御内示之趣は尤相心得尊書他見仕間敷候併箱館都合も追々  
宜敷謝罪狀差出候由傳聞併右は確報は未だ無之候其上過日追々出船にも  
相成候間先只今出兵は不被行と存候先方都合に寄り可相計候尤尊公御私  
心に無之段は明白に御座候相含可申候此旨拜答候也

二 廿二

野 叟

對 山 明 君

内々

(野叟は嵯峨實愛の號)

別啓

追々墨隄華開滿候由に候へ共老鷺一步も得出不申況や開語の華杯は更に  
未得一見候是計は御安心可被下候色々風聞も可有之候得共惣體各別之華  
見も無之と存候御降心被下度候

岩倉具視關係文書第四 (明治二年二月)

二百三十一

一五 岩倉具視書翰

〔木戸孝允宛〕

明治二年三月十四日

昨夜は卒爾に出頭種々御世話忝存候其砌は頻りに愚意申立如何御承引被下候哉懸念此事に候得共偏に宜敷御賢慮可被下伏る冀望候扱此書狀一覽恐愕之次第乍去即今々様にも有之間敷哉とも推察候今日俄に右形勢に立至り候事哉猶御賢考御報被下度候仍草々如此候也

三十四

對

木戸殿

一六 松平慶永書翰

〔岩倉具視宛〕

明治二年三月十七日

聖上益 御機嫌能被為渡別而追々晴色暖和聊無御滯 御通輦可被為在と重疊奉恐悅候 大宮 中宮 准后宮靜寛院宮被為揃彌 御機嫌能と奉恐悅候隨而 閣下愈御安全珍重存候近來御所勞如何被為在候哉相伺度候扱

又先般 御出輦前十津川其外浮浪士等 御東幸抑留彼是不容易勢先々御出輦相成奉恐悅候得共隔地風聞にては種々之論も有之哉にて正に伏見等にては浪士等二三百計り脱走候哉にも承り甚以日夜苦心御案し申上候に付重臣二人差出候間萬事御聞取可給候 御用多中甚以令恐縮候得共何卒拜謁被 仰付被下候様希入候委細之心事兩重臣 申含候仍而一寸令啓上候也

三月十七日

慶永

新大納言殿

尚々時下御自愛令專念候此品乍輕少令進上候御笑收畏入候多忙走筆被免可給候也

一七 岩倉具視書翰

〔木戸孝允宛〕

〔岩下平宛〕

明治二年三月十九日

日々晴朗益 御機嫌能被為渡途上何之御異義も不被為在兩 宮御參拜も

殊に快晴萬無御滯被爲濟候旨桑名に而は漁獵も 天覽之由追々報知扱々  
恐悅御同慶候各位にも御安全令賀候 小子も無事在坂是よりポウドイン治  
療頼候事に候扱別紙或人建言二帖御一覽之上に而大久保に爲御見被下度  
御東下之上御参考一端とも存候事に候同人も廿日廿一日には歸京と存候  
其砌當職中建白寫も差上候事と存候池邊氏一書も入一覽に候猶御留守中  
凡而よろしく御配慮可給候尤貴は尤大久吉井各四月十日迄に東下之事條  
公より頻りに被申越候條必右期限御同行可給候早々以上

三月十九日

尙々木戸老臺へ申入候過日出頭御頼申入候執事之義吳々も御承引可給  
候事と存候御出來次第御廻し頼候扱西本差登候會計一事は能々御聞取  
可給候一大事之事と存候事に候早々以上

木戸準一郎殿

岩下佐二殿平安

對 岳

一八 岩倉具視書翰

〔木戸孝九等宛〕 明治二年三月廿二日

日々快晴一段之事に候益御機嫌に而爲涉御途上凡而御平穩御互に恐悅此  
事に候各位にも彌御壯健欣然候抑御留主中在職甚御無人に付彼是懸念風  
と田中國之助義存出し病氣押而上京之事申遣候所幸上京早速下坂出會致  
し各等東下の上は御留中云々申談候處承伏謹而御請申上候との事に候元  
來舊年於東京御暇願出候砌段々被召留候得共強而歎願に付別段其内情承  
候處一つは母の爲め一つは舊藩の爲め一つは斷然洋行他日大に爲 朝廷  
盡し奉り度の旨趣に付小子にも兩兒洋行志願に付共に同行約し置候内實  
に候右故今度も御留主中の所可勤仕候得共洋行之節は是非々々御暇願度  
旨に付其邊は請合置候様申入置候事に候一存取計如何に候得共御留主中  
實に御無人殊に辨事是と申人も無之旁前文次第に運ひ候於御同意は表面  
之所左之通御取計可給候

一 當人より病氣押る上京御内命に付參著之旨辨事の可届出筈に申置候  
其上にも病痾難溢追々歎願之旨も有之候得共御無人とか思召とか何  
とかに付押る出勤可致御沙汰書被渡度事

中御門に申入右邊に御勘辨被下度候實は當人再勤所存も無之再三強る辭  
表に及び候譯故表面只々出仕の事素り不都合候間此邊深く御熟考御沙汰  
御頼申入候小子存候には辨事に同御留守に有之候は、急渡御用辨と  
存候る右所置に及候事に候宜敷御推量可被下候仍早々如此候也

三月廿二日

尙々尙以る是は甚如何之事に候得とも右當人御沙汰書御渡し濟の上  
下坂にも病間彼是示談執筆頼度件々も有之候間何卒當月中にも凡  
各等東下迄之所にも同人拜借願度候間何卒御勘辨御頼申入候元よ  
り御用にも小子より願出候事ならは不待論事に候得共小生依病氣湯  
治御暇願中の事に名分不相立旁心配罷在候間何卒兎も角御相談に

る早々御取計御頼申入候尤小子より願候る可然との御見込に候へは  
御用筋に付暫時下坂被 仰付候様出願可仕と存候也

木 戸 殿

大久保 殿

岩 下 殿

對 岳

一九 岩倉具視書翰〔中御門經之宛〕 明治二年四月朔日

別啓申入候

一 伊藤俊介退職之儀一兩日中願書可差出右は段々説得候得共當時兵庫港  
は一大事之處公卿にて御知縣事無之候ては御威光不相立との事段々尤  
之次第に承候乍併彼も從來自任鞠窮盡力之儀決して退職被  
聞召候ては不相濟勿論不馴之者にては害而已可引出に付竊に口氣相考  
候處判縣事ならは公卿之下に立ち奉職いたし候模様付速に公卿知縣



事に被

仰付當人には出願之趣難被

聞召候得共何分要港之儀に付誰知縣事被

命候間宜敷輔翼判縣事相勤へく候様

御沙汰希候

一人體之處は久我綱丸彌越後之處手切御不用之儀に候は、同人に被

仰付度候若し差支へ候は、議參御留守丈にて宜敷御人撰一應小子に御

打合其上被

仰付候様願候

一何事も御留守中西京にては不決一々御

在所伺之上之事に候得共此儀は少々見込之次第も候間小子相決し御取

計ひ願候尤東京へは小子が巨細申入遣候

一素より御留守議參御評議之事に候得共不參も難計其内本同藩之儀に付

木戸準一郎へは此書狀爲御見是非御談可給候右勿々如此候也

四月朔日

具 視

中御門大納言殿

二〇 岩倉具視書翰〔木戸孝允宛〕 明治二年四月三日

追々薄暑候彌御清榮欣然候扱御東下之事當月十日迄之筈に候處大久保より申越候には同人足下に御面會は不申候得とも小生發足同時出行心得之旨尤勢州歸京直に萬々御申合之旨に候如何被成候哉若し彌前條之通候は、廿日前後何分國船より御同行可申存候

一今度東京に御基礎云々實に至重至大之御義と深く苦心に不堪事に候右に付愚意件々田中の極密申合先足下其上大久保等懇々御申談之事頼込歸京候得と御聞取遠大御方略眞に皇國被爲立候様千祈萬禱候愚論素り當否不待論事に候得とも只々苦心御參考一端に申述候迄に御

一 小子事も明後五日より有馬湯治心得彌應し候は、一回入湯直様歸京段々御相談可申候得共夫迄大久と御兩人厚く御談し廣く御堅考此廉は云々彼義は云々一見分り候様田中の御申入一ヶ條々々巨細ヶ條書に御清書被下度遅く候も十二三日比には歸京心得に候而して更に御同行下坂覺に候

一 田中事御留守中御様子御見計相成は同人東下之様御取計有之度存候大に御用辨にも可相成存候

一 井上聞多伊藤俊介兩士とも同船同行之約定致し置候

一 伊藤一步退身云々中御門の得と申遣し候定得と御聞と存候

一 津田橋次郎の會計始終之事申入候様申聞置候實に會計之事難事第一等と存候

一 薩長當分御殘し兵隊悉く東下被命候は如何今度は凡る斷然御處置も有之候事大に御威力にも可相成候尤入費之所は内々被下候も可然哉

則會計六ヶ敷候は、御預り三萬兩之口にも御出しに、よろしく存候是も得と御賢慮被下度候何分今度は兎に角御一新の成否と返す々々苦辛足下大久の如き大憤發彌以、開國元臣たるの義懇翼仕候附は、大事件粗御相談申入置候上東下仕度存候  
右早々如此候也

四月三日

對 岳

木戸大人閣下

二一 岩倉具視書翰「木戸孝允宛」 明治二年四月六日

前略

三日御兩通舊藩士某持參拜見同人面會何も承候

一 田中より御内談申入候ヶ條津田を以、差出候書狀夫々御承知被下候事  
一 と存候何分歸京面上萬御談し申入候も高論を可蒙と存候

一 浮浪云々河村に申入候通り御手は可被付候得共西京に於最早決る彼是は無之事と存候只東京懸之事に候乍去是より御手の被下方に於亦決して不足患事と存候

一 小生兎角同邊候得とも不日歸京心得に候何卒廿日前後必御同行東下仕度候間其御心得被下度候

一 田中より御内談の筋岩下へ申入候様申候事申落し候同人より尊臺大久保等へ申入候通り咄し合候様御傳へ被下度候

一金札の事津田より御聞之通り是も東京に於御處置ならては決極附不申と存候

一 中宮御附女中若江云々決る勤仕之者には無之一條家御出之間御讀書被上候丈に於候素り大攘夷論頓と御採用の義に無之元大原卿被上候丈の事に候只今唯々右様の論主張唱居候風聞に候尤手之附方無之者に候但し中宮御附上臆始め一人も不都合之者無之是は小生承知之事に候間御

安心可給候

一 今度東京之御大事實に不可言御一新のは勿論 皇國存亡今度の一舉に可有之候存するも亡するも只々在職一心同力に可有之候而して凡基礎相立候處にて斷然と在職之徒御取替可然存候三條老臺大久保廣 深岩下後藤小生 凡此輩員外被仰付候は、上々策と存候此義意味深長愚考仕候依る今度の一時は御互に死力を盡すの秋と存候御互に死力を不盡候へは眞に天下之事夫限りと存候事に候暮々も田中より申入候々條能々御賢考御決論可給候尤愚論愚考極り候事に候得共小于一分丈は右等より思慮無之候一賈金云々の事も急と根より起し直し御改めならては迎も々々難被行事と存候

右御返事旁如此候也

四月六日

尙々大久保岩下田中等御寄合候得と々々御評議被下度存候也

十三日比には可令歸京候也

木戸準一郎殿

對

二二 岩倉具視書翰〔木戸孝允宛〕 明治二年四月六日

別紙認候後只今此二通到來早々入一覽に候彌御互にコスタリヤに東下可仕と存候如何御賢考有之候哉大久岩下等にも爲御見可給候也

四月六日

具 視

木 戸 殿

二三 岩倉具視書翰〔木戸孝允宛〕 明治二年四月六日

別紙德卿より來狀入進覽に候廿日前後同行之旨及返答候此段御心得可給候也

四月六日

對 岳

木 戸 老 机 下

早々御一覽

二四 岩倉具視書翰〔大久保利通宛〕 明治二年四月七日

前略高免御參 宮も御志願之通り被遂候事と令遠察候殊に好天氣つゝき一入恐悦に存候今日當りは定而御歸京と存候今度東京御會議に付愚意件々田中を以而木戸岩下等々懇々示談の事申入置候得とく御聞取御賢考置に而小生歸宅候は、早々御談し申度候今度は御互に決心假令虎子を得す候とも虎穴に入るに非すんは御一新の事は物かは

皇國之存亡只此一舉と存候返すく御熟考専ら高諭を蒙り度存候付而は是非東下御同行申度と追々木戸士に申入置候條同人を御聞取可給候凡十五六日コスタリカ船か廿日前後ニユーロク船か兩船の中に小生老臺木戸吉井渡邊門脇伊藤井上

右御同船申度心得に候東議定々追々來狀有内々木戸に廻し老臺兩人限り一見申入置候事に候八日夜船歸京之心得夫迄木戸士と得と御談合可給候也

四七

具視

大久保殿

二五 岩倉具視書翰

〔木戸孝允宛〕 明治二年四月七日

前略多分八日夜船歸京心得に候得とも老臺二三の外御咄し御無用右は折角三十日御暇中少しく閑靜に罷在且田中より申入候件々急渡御懇談大に高論を蒙り度右而已に打懸り申度存候事に候外々々相知れ候は、又々日々來人迎も間無之哉と苦心此段御含可給候早々如此候也

四七

中山正三徳大三名の書狀内々大久岩下丈は爲御見可給候也

木戸殿

平安

對

二六 岩倉具視書翰

〔三條實美宛〕 明治二年四月十三日

前略高免六日出御狀十一日拜見乍例代筆高恕是希候

一至急東上之事切迫に御申越千萬令恐察候速に發途可致之處烏丸卿家來城門司馬太津田橘次郎等へ申合候通不快彼是不得已次第に付來廿日或は廿一日外國船乗組海路二日にて東著仕候心得に候延引之段幾重にも御斷申入候

一御地御様子實に掛念に付俄に田中五位渡邊昇兩人「コスタリヤ」に乗船來十五日發途東上申付萬々御談申入候筈に御座候右は大小侯伯中下大夫始め召に應ずる者初御下問の御沙汰振専ら御大事と存候に付木戸大久保等申合各見込言上之事に候尤四月中旬參集之儀に付未だ何等之御

沙汰も無之と存候得共行違候亦は殘念に付態々田中渡邊差出候委曲當人より御聞取可給候

一 草莽士之事内外に當り不一方苦心に付渡邊昇へ專任して周旋候様申付候當人確乎決心斃るゝ迄引受寛猛處置可致旨御請合手を下し候委曲は當人より御聞取可給候

一 京攝及關西は先づ平穩唯々一事は楮幣不融通之儀に於尤困難候得共是も在廷之者と協議聊か見込相付け候定る色々と御聞込御案しと存候に付御安心の爲に申入置候

一 京都御取締向之處嚴重に手を付け尾藝備三藩へ別段大兵を出し緩急預備は勿論京都府軍務官刑法官と右三藩申合せ探索も十分行届候様手筈仕候尤も敵の來らざるを恃むに無之緩急如何之事起り候共右三藩主人始め同心戮力處置可致候京都之儀は萬々掛念無之候

一 御地之事は如何にも苦心に付薩長土肥四藩一大隊宛至急出張申付候猶

時宜に依り薩長は今一大隊つゝ差出候手筈に仕置候抑人心恟々議論紛紜廟堂之輩頻に苦心慨歎之趣追々報告有之全く草莽士之集會と兇徒之離間煽動と外國事件の混亂等より起り候事と推察候素より少々之騷擾は可有之筈に候得共 皇運時に乘し大政復古に當り在廷之輩は同心戮力各自其責に任し斷然と死生之間に立ち神武帝創業に基つかせられ候御趣意を奉體し勤勉勵精候は、何事か成らざらんやと存候併し今日目的と仕候處は天地之公道に基き至誠を以て萬機施設被爲在度尤側に兵力を畜へ朝威を輝し候様有之度候既に木戸大久保も眞に大決心來二十日前後同船東上候殊に木戸は餘程大病に候得共一身を顧みず發途之事に候勿論御如才なくとは存候得共尊公始各位皇國之安危は今度之會議にて相決可申と一層御盡力に於御方略被運候様千祈萬禱仕候  
右言上迄如此候也

四月十三日

京都より

具

視

三條輔相公閣下

追而後藤廣澤大村香川等へ能々御傳聲希上候 小子從浪華九日歸京仕候也

二七 岩倉具視書翰

〔木戸孝允宛〕 明治二年四月十五日

來人中誠に一筆而已御請申入候

一書類夫々正に入手候跡より巨細御返事申入候

一御所勞御保養此御時節實に苦心爲朝野深く御手當有之度昨日も申入候

通り寸刻も早々ホウドイン御治療之事千祈萬禱 小生も其當分は格別之

事も無之存候處追々快方全く名醫丈之力と相覺申候返す々々一日も早

々御下坂可然存候

一御困りとは推計り候得共暫時に亦も一兩日中御出會萬御咄し承り度候

御都合次第御申越可給候

一御東下之事暫時延引之事懇命不得止事と令承知候御東下誓而御間違無

之候は、なく々々承伏候

一八ヶ條件々跡より御請申入候

右早々如此候也

四十五

御受

具視

二八 岩倉具視書翰

〔木戸孝允宛〕 明治二年四月二十三日

尙々東京様子も格別さし當り替り候事も無之様子に候只々此上之御

處置による計と存候伊藤一兩日後れ候足下には必々十日より遅延に

不相成様吳々も御頼申入候早々如此候也

其後は御所勞如何哉御保養專一と存候 小生事廿一日九字夜也兵庫出帆廿

三日十一時晝也横濱著に亦同行何れも無事御放念可給候海上之速なる事

矢の如く驚入候事に候扱兵庫に伊藤より入手懇々御書正に一見御苦慮千萬恐察尙大久保と能々可申合候吉井必都合能可打運と存候次第も有之候扱様濱に承り候へは外國事件も萬事無異相濟元の如くとの事に候猶明日は東京參著巨細可承候得とも一事は先々安心候間爲御安慮一筆申入候仍早々如此候也

四月廿三日十二字

横濱に認

具 視

木戸參與殿

平安至急

二九 岩倉具視書翰「大久保利通宛」 明治二年四月廿七日

前略昨日は懇々來示如命即今之事情追々承り候へは承候程只々仰天長大息而已最早必死之覺悟仕り斷然萬御改革無之候ては天下のことは去り可

申存候付明晩亦是明後朝可令出頭候間御在宿可給候

且今日刑官人々より事實承り候付足下にも一通御聞置被下度中島差出候御返答には不及候只々巨細御承知可給候仍て早々如此候也

四 廿七

對

大久保殿

内啓

三〇 伊達宗城書翰「岩倉具視宛」 明治二年四月廿七日

拜啓薄暑之候愈御清穆奉賀候此間は無御滯航海御東着先日之滿朝渴望申條輔相公始被得大依頼候半實に内外岌々乎之勢今日之至艱大獨當唯仰閣下之鼎力而已外國官緊要事件數々有之品々拜趨陳述可仕處僕發宿病不得參 朝恐悚ながら荏苒に相成候得共東久大隈多分及吐露候半卓論奇策は聞き當今迅速萬機御實踐に無御座候は乍憚不可救之勢泣血之至奉存



候將又僕知官事之重任是迄再三數回奉欽辭候得共何分不被 免是迄勤務仕候處彌不肖衰耗迺も奉職難仕過る十七日輔相公迄更に歎願書差出候處可奉待閣下御着旨云々無止相勤仕候處既に兩三日に至候故今日にも被免候半と奉存居候仕合何卒く速に 御沙汰之程奉希望候實に不堪任不當器辱 朝威候段死有餘伏る御憫察奉希候恐々謹言

四月廿七日

二伸此度は豚兒御同航御懇切被成下感銘之至奉存候以上

岩倉公閣下

宗 城

三一 岩倉具視書翰〔議定・參與宛〕 明治二年四月廿九日

一書拜啓追々向暑之候聖上益御安泰被爲渡御同然奉敬賀候西京各位御健穆御勤務拜賀仕候小生過る二十一日夕刻揚碇海上順風同二十三日午前横濱著仕候間御降慮可被下候然於西京御互に傳承之通當京御著疊後一時

中外難題相續候由之處外國應接も落著内地草莽之徒も巨魁等御處置有之先鎮靜目下之風波は相靜り申候實に一時輔相始痛心不容易儀と推察仕候其他基礎培養事件發表之儀は無之候且發程前御熟話申入候通東西隔地浮説流言其間に充滿仕候儀は必然に付不斷往復候様有之度夜白冀望仕候右不取敢御報知耳余は後便と申洩候尙時下御自愛御盡誠奉專禱候勿々頓首百拜

四月二十九日

具 視

西 京

議參御中

三二 嵯峨實愛・岩倉具視連署書翰〔木戸孝九宛〕

明治二年四月廿九日

追日薄暑相加候處御氣體御清快と致推賀候當京近日外國草莽等之混亂は一時霜滅候處諸官在職兎角他顧之念相生無忌憚協和盡誠之場に至兼一種

之内部疾と相成隨而下も人民も何となく蹙額甚不景氣に有之當感此事に御坐候就るは只管足下之調劑を渴望致し候間定る時日遅延は無之筈に候得共至急御催促申入候此書狀御披封次第即刻御乘艦幾回も瞻望致候書外不日面上申略候勿々頓首

四月廿九日八字

實愛  
具視

木戸 參與殿

尙々折角御保養何分草々東下專念致候以上

三三 伊達宗城書翰

岩倉具視宛 明治二年五月朔日

岩 倉 公

宗 城

梅天矇々愈御清穆奉賀候昨夕は卓偉之御教說實に敬服感佩仕候陳は宗城辭表仕置候處過望之高諭加之英公使より及御懇話譯迄被仰聞畏入申候尙退考之末御請答可申上心得に御座候處今日三字公使弊邸へ參其末 朱門

へ過日御來臨之御禮として罷出候趣に付若し爾後公使心付杯は宗城迄申述候様御返答被下候時は如何とも不可爲就るは荒々退考之次第及陳奏候條何分情實御憐察之上可然輔相卿御申談願達候様奉伏希候

○英公使パークスは先年薩藩を弊邑へ罷越得緩話候以來尤懇意に仕外國事務相勤候様相成英人兩度迄不慮之暴害に逢候處程克以朝威斷然御處置有之候故宗城か微力かと存候也尙又懇切に出會申候得共其實は愚昧無識故話易く存候譯にてへいどん致居加之四月初旬迄之應接度毎に怒罵愚弄之甚敷如何に鐵面皮無識之宗城にても難堪忍乍然朔日絶交之儘にて辭表仕候るは不堪恐悚候故馬車一條落着迄はと勉強仕候乍然反省すれは不肖矇劣不堪任不當器老耗之身にて奉命仕居候故 公私之汚辱を受に無相違過日之辭表にも近日加愚氣力衰候やもの忘すれ甚敷相成應接之次第杯も近頃は傍にて判事等之中出席筆記爲致候位之事にて身分は如何様相成とも更に不相厭候得共如何にも被爲於 朝廷御不人撰に相

當り第一表向之應接なしにパークスと專對獨當判事も不在にて彼か陳情心付之事件間違聞込候程も難計慙愧當惑極り候

○一體各國との交際は同様懇親可申義公平に候處今日にては徳川氏は佛に親み新政府は英に親敷素々英國と申内パークス 尊 王朝廷を奉助候胸裡故自然之勢に御座候得其他公使共心中不平に可有之其處は元來別懇之宗城奉職候亦は一つ之不都合も御座候

○東久世は膽力有之明敏果斷識量壯年往々重貴之大任御依頼之人にて各國公使へは宗城を親敷萬般之都合實に當器と奉存候條知官事無異儀閑叟も老練に亦宜と存候得共些難澁に可有之や東久世之跡は春岳なら致々勤勵無疎漏是亦的當には無御座や甚差越恐縮なから事實之處及陳奏候吳々宗城儀は斷然被免候様奉願上候恐々草々

五月朔日

二仲別冊乍略輔相公へ御示合奉希候以上

宗 城

岩倉明公閣下

密奏

御通閱乞丙丁

三四 伊達宗城書翰岩倉具視宛 明治二年五月五日

岩 公

宗 城

御直披

愈御勝常奉賀候然に交際に付告諭之文案中井弘藏へ申付立稿爲致候處先朝 勅裁之事跡追記不仕且余り長文にて賢慮には難適と存候得共及呈覽候條攬要除繁凡俗に通易様御添削是祈

○蝦夷開拓布告之草稿は官中にて申合候處は昨日呈閱之儘可然と再評の趣申越候得共着眼不分明に付明朝は篤相尋候上陳述可仕候恐々頓首

端午當賀

三五 船越衛書翰〔岩倉具視宛〕 明治二年五月六日

謹肅奉拜啓候梅天之氣候先以益御機嫌克御奉勤被遊殊に昨年已來 王事御執掌東西御奔走不容易之御竭力被爲遊奉敬賀候尤も昨冬は御重病之御容體私酒田在陣中遙かに奉拜承實以御氣遣奉申上候就而は早速御伺候之爲め一書も可奉呈筈之處隔地之義其儀も不仕奉恐入候萬御仁恕可被成下奉伏願候然は別封建白書一通不得已之微衷より乍恐奉瀆尊嚴候全體階下之拜伏可奉陳上之處病瘳罷在步行難相叶不願恐多書取を以奉申上候唯一片之微衷御諒察被成下宜敷御採酌之程奉懇禱上候恐惶謹言頓首

五月六日

船越洋之助

岩倉公殿下

御執事

奉再白候

本文建白書通乍恐輔相三條公へも奉差上置候間爲念此段奉申上候

若松三宮耕菴の酒田參謀局へ之來狀寫し

先般酒井徳之助の若松城御預け被 仰出候云々之義に付御問合御紙面之趣致承知候去月下旬東京會計官の轉封之御達相廻り申候然る處市民漏聞に及何となく不穩之情狀も相見且其他見込之件々も有之軍監兩人東京行政官の罷出參與御列席之上右御轉封一兩年御猶豫に相成不申而は移住難相成云々且市民苦情云々等之義及建言候處御一同御諒納に相成候乍去一旦西京に被仰出候事故輕易御變更には難相成不日 御東幸可被 遊候間御再議可被爲整との御事に至り申候自躰千里各天之處事情徹底いたし兼以謂方底圓蓋之御幹も有之條申上候處宮公卿之御内に早急御東下可被有様以急報西京の御運に相成候に付遠からぬ内御下向にも相成親

く御巡覽被爲有候得は愈以見込之件々も貫徹可致歟岐望罷在候猶 着御被爲有御模様相成候得は可申入候先は一應之御報知迄如是候也

若松出張

三 宮 耕 菴

三月十七日

酒田御在陣

參謀中

三六 船越衛書翰

〔岩倉具視宛〕 明治二年五月

乍恐謹を以書取奉建言候奥羽御處置之儀者普く衆議を被爲盡候上猶も厚大之

御仁惠を以御寛典之御處置被仰出候處一同感戴難有奉御請候爾後彌轉移之期限速に被仰出夫れ々々御處分被爲在候義と奉存候處今般若松出張

仕居候三宮耕菴を酒井德之助轉移之義一兩年御猶豫可相成云々之旨別紙之通酒田參謀局に申越候趣右耕菴見込之件々不得已情實有之參與衆御諒納にも相成候旨仍は御深遠之御廟謨可被爲在段不奉伺得候得共亂擾後時日も無之に付未だ 王化普く難被爲行届其等よりして愚民共猶舊主を慕ひ彼是困難之常情等御憐愍被遊候之御義に御座候歟東西一視天壤覆載之御仁意故左も可被爲在と奉恐察候乍去右等之御義に公平至重之御大典を御弛め被遊は遂に天下之大經大法は相立申間敷歟と乍不及奉過慮候且一兩年も御猶豫相成候内には雙方之民心狐疑を生し彌固結致し後日之御處置方益御困難相成可申と甚以憂苦之至に不堪奉存候右等之情實筆紙に難盡候間篤と民情御深切御遠慮被爲在度奉懇願候將又酒井家に於ても方向相改め 朝命遵奉勤 王之外他念無之と兼申出居り候付亦は私義庄内出張中同家臣共の時々 御趣意及説諭候毎に主従共素々朝命遵奉仕候上は若松表に轉移之義決意罷在候旨申出候素より此義左も

可有之事に候然は今日其轉移御猶豫 朝廷之御大典御弛め被遊候は彼等勤 王と申出候之條理に於る却る不相歡之筋に相當り可申歟と奉存候何分にも兼る被 仰出候通り速に轉移之期日御沙汰相成候様被遊度奉存候乍去若松之義は燒亡後唯本城相残り候而已に今般轉移に付家中共の居所立構え等にも困窮仕候段も御憐恤被 思召候得は金札御貸下げ等彼是御救助之道も可有之且家臣共は一時に不引移とも徳之助并家族共程速に引移り候は、御典刑之御趣意被相行候義と奉存候此義別る肝要之御義に御座候且昨春以來賊徒大義を失ひ猶 王師侯より天下之兵士勤王之一途に志し數百里外山河跋涉非命之死を遂げ候者不尠上み 天廷之御武威下も兵士之艱苦より遂に一先つ鎮定に至ると雖も未だ方向不定者も有之全く平治と申す御場合にも至兼候折柄即今御典刑御忽せに被遊候様にては 御天裁御威信貫徹不仕義と奉存候仍るは右數多戰死之兵士も地下に於る瞑目仕間敷と彼是痛哭流涕之至に不堪

奉存候然れども右等之 御廟謨には不被爲在次第に候は、實に難有御義奉存候全體右件三宮耕菴へ篤と情實相正し候上可奉建言之處何分隔地之義急速往復も難相叶候付只々愚衷過慮之餘切實不得已か不憚忌諱耕菴より之來書寫し相添へ奉建言候如斯 御大典後世御垂憲可被遊御義聊御弛忽等相成候様に於は乍恐 御親裁之御賞罰不相舉候義と奉存候私義重病に罹り長々病薨罷在候に付 殿下に拜伏可奉縷述微衷義も不相叶不得已乍恐管見之儘以書取汚尊嚴候要之萬々御典刑之 御趣意確乎御行被遊候様幾重にも奉懇禱上候誠惶誠恐頓首頓首

五月

船越洋之助

岩倉公殿下

御執事

(附箋) 酒田在陣監軍か三宮耕菴書狀寫へ相添へ差越候書而其儘奉入御覽候御

前限り御覽濟之上御下け被下候歟又は御投火可被下候様奉願上候  
一書呈上仕候先以 主上益御機嫌能去月廿八日東京被遊 御着輦候よし  
拜承奉遠賀候然は酒井家若松表に轉任之義に付云々之情態過日來御親見  
之通の譯に御同前苦配罷在先生には既に遠路御馳せ登り多少御辛勞御  
盡力之半に不圖去月下旬若松在陣三宮耕菴より別紙寫之書狀到着局中一  
同愕然不堪憤慮候兼々當局着眼とは相違ひ乍恐 朝廷之思召にも可相悖  
かと慷慨罷在候尙若松表出張之軍監貳名出府に付亦は最早御聞及も可有  
御座右の御報知乃ち可申上之處探索筋等之事件有之彼是日間取り且つ口  
頭も無之て碎兼候幸に此節書記林庄次出府に相託し候間委細同人より御  
承知可被下末毫 御着府かけ御罹病殊更御再感御重症御難苦之段奉遙  
察候漸々御快愉之趣欣喜此事に御座候御保養專一奉禱右迄而已御報申上  
候謹言

四月十九日

高柳熊六邦秀(花押)

岡田 一郎 信(花押)  
本田 權 八

船越洋之助様

執事

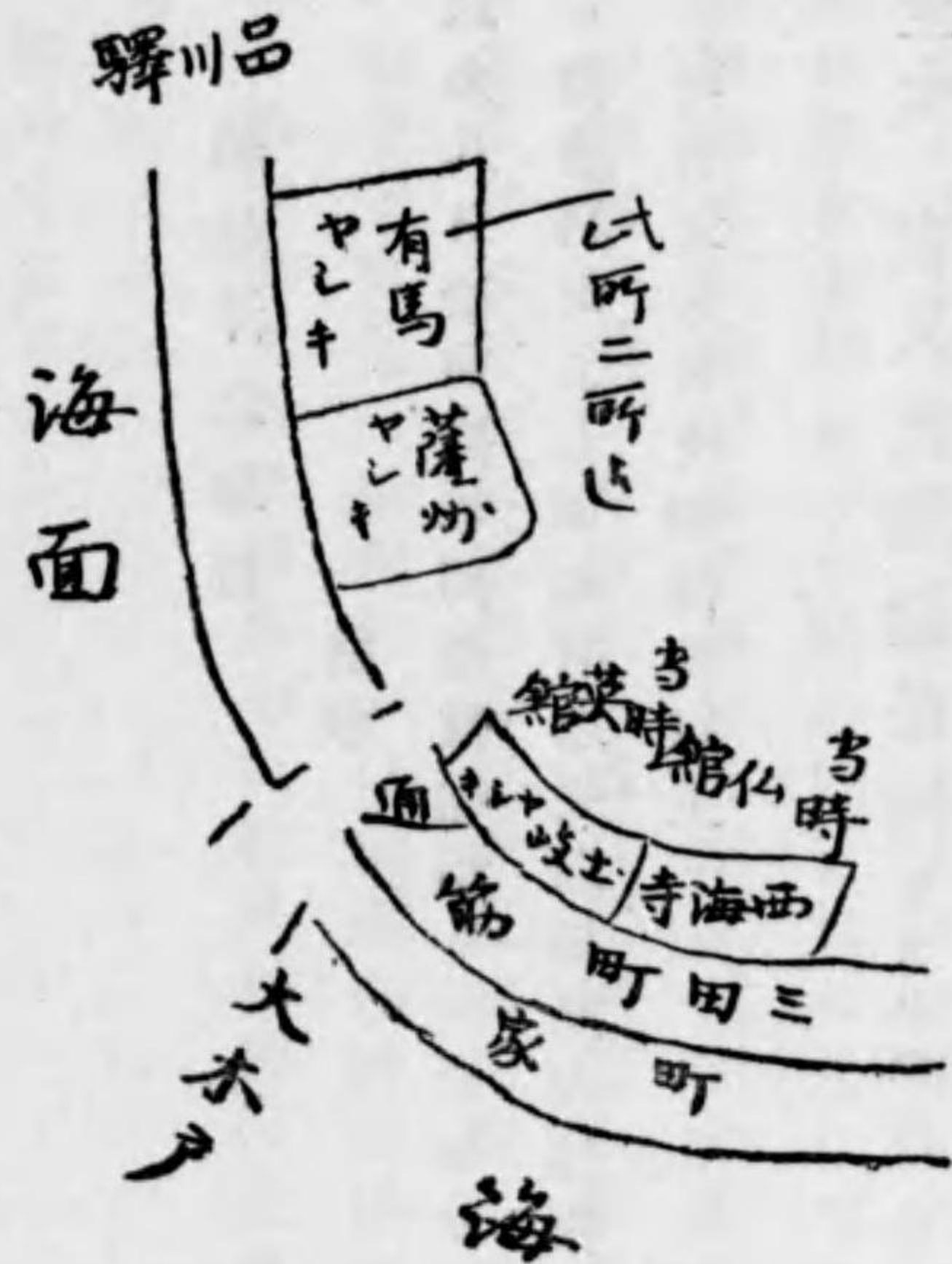
尙以去八日松前據賊御進擊相始りエサシヲトへ邊より上陸兼御定算  
通り御勝利之よし報知有之先以初度の捷報爲 皇國奉賀候此後の眞報  
不日可有之と日夜相待候以上

三七 東久世通禧書翰

〔岩倉具視宛〕 明治二年五月十一日

一英公使伊達亭へ昨日罷越有馬屋敷段々所望若 天子御小休處に付御指  
支御座候得は夫丈之處は圍を致し殘し置可申若其上にも御指支ならば  
赤坂紀州やしき申受度政府へ近き方勝手に御座候間丸ノ中にも不苦乍  
併下濕之地は好不申高乾の地にて駿州臺九段坂等地處にても宜と申候

明後十二日罷出候間夫迄に御決定可被下申歸候右に付外國官の議論にては英國兵隊は是非遂談判今年中に歸國爲致可申高輪は有馬邸要地と申候得共唯今の土岐邸も高き場所にて通り筋を眼下に見下し何も替り無御座候且又各國公使館を江戸へ築造致には廣濶に無之るは不相成處



々に散布致候ては甚不都合を生し可申に付高輪より殿山へ掛て各國旅館を造り候得は可宜萬々一兵端開候節にても彼は軍艦を以出沒致し候得共陸地の一ヶ所を以て不可論下關浪花横濱の如き要樞を一時に摧き可申陸地の兵ならは高輪の一ヶ所位は我國の兵勢を以て一時を破壊可致候高輪を御免許無之節は段々丸の内邊にて見立候節は甚困入候且行違も出来難計右等の御懸念ならは何卒高輪にて御濟被下度段申出候明後日事件に御座候間猶又今日參與とも御相談被下度候

一 中島五位彌民部官へ御用ひ哉に拜承知事阿州家來連にては急度六ヶ敷かるへく存候中島を外國官へ申降度有士間に名も聞有候人物故可宜相考候外國官一同甚懇望致し候御勘考可被下

一 森金之丞制度寮判事一體に不伏多きよし三條にも心配御座候薩州伊地知正治學術も有之制度の事に執心のよし右之人物を御入被來候ては如何哉



一兵隊調練御覽昨日軍務官が十三日と申出候得共當節御齒痛御不例のよし十三日御覽六ヶ敷日限追ふ可被仰出旨申達置候付るは諸大名皆御召被下物候事折は暑氣之頃にて澤山之事故雨天順延之節御物入度よし坊城へ相談致干菓子之立派なる折を被下候ては如何哉種々評議致候得とも肴にても六ヶ敷御座候間無據菓子折に可仕昨日坊城へ先十五七日頃と申傳置候先は要用申上候以上

五月十一日

追ふ昨夜大久保書狀拜見安心此事と御座候何卒一日も早く御基礎相立候様企望致候以上

岩倉殿

通 禧

三八 岩倉具視書翰「木戸孝允宛」明治二年五月十八日

御狀致披見候黃梅之節彌御壯健珍重奉存候然は縷々御懸念之趣敬承候得共行議兩官惣被廢入札法にて御入撰御決定に相成候大原之處は上院議長に被仰付池田蜂須賀以下留主之諸候御役御免にて近々版籍返獻御聞濟之上歸邑致候積り制度萬端御更張之義可被下候間何卒早々御上途被成候様致度實に千載之一時萬々遺漏有之候は不相成候間可成丈御攝養被成神速に御着府に相成度先は早々要用及貴報候也

五月十八日

尙々版籍の事も實に苦心候得共十分には参りかね候先々別紙丈に治定候多々心痛候兎角一日も早々御東下可有之候在京中旁御約申入候處今様に御延引にては實以る如何と存候只管至急御東下可給候也

具 視

木戸閣下

別紙も未だ評議中なれとも今日には決し候事に候

三九 宇田淵書翰〔岩倉具視宛〕 明治二年六月十三日

亞相公閣下

宇田淵

御親閱

謹上

謹啓

梅雨之氣色にて連日鬱陶敷天氣に御座候東京は如何と想像仕候  
閣下益御機嫌能夙夜御勉勵被遊候趣爲 國家奉恭賀候頃日は追々御用も  
御運ひに相成難有奉存候御賞典被爲行候に付臣等迄爲御慰勞過分之御目  
録下賜難有仕合には候得共實に恐縮之至に候臣等に至ては所謂徒に文墨  
を持して議論するのみ攻城野戰之功あるにあらず參謀之名のみを以て今  
日之恩榮を蒙りし事心に於て深く愧入候次第に候乍去右賜金を分與して  
親戚故舊窮乏之者を賑し同く  
聖恩に浴せしめんと存し吳々御禮奉申上候

一中御門卿御發駕臣等大に失望仕候上に確乎不拔之御持論無之ては御留  
守之處も少しく懸念仕候同卿へ御托し申上置候件々委曲御聽取奉願候  
一公議所日誌議案録等追々閱見仕候處何れも不都合千萬之議論のみ可取  
者十に二三を難得と存候臣最初存候には逐一批評を加へ  
閣下之電覽に供し可申之處愈出て愈不都合之論のみにて批評を加へ候意  
も無之様に相成申候右等之愚論御上木に相成候は眞に梨棗に災すと申者  
にて國事に於て有害て益有之間敷と存候殊に外國官問題箇條等公然流布  
致し候て無妨ものに候哉懸念仕候

〔實名を可用議等謀々其中増田某等之論に此事急務に非ず暫く舊貫に仍  
るへし

右之論言簡にして眞に實地之論なり

〔赦令可止之論は一を知て二を不知御大禮毎に必赦を被行候ては御不都  
合に候得共有時ては不可無論者此意味は不解と存候

「割腹可禁之論尤可笑論者は定て臆病者と被存候  
朝廷天下之士を御憐恤被遊候 思召より可惜人物罪み足るを不待候て  
死を急き候事を御防被遊候一通り之御禁令は 思召之厚きを天下に示  
す所以に候得共官より割腹を被命候刑典は不可欠事と存候士道を失は  
しめすして刑を加るには割腹尤妙にて候

「雙刀可廢之論杯は關係實に不小徒に天下之士を激せしむるのみとても  
不可行行はれて不相濟と存候艸莽激徒杯一夕に此論を聞ては一同定て  
憤然何れも其腰間横る所の日本刀を按し論者に逢著して其氷の如き鋒  
三寸を食はしめん事を欲し居候事と推察仕候嘆息重嘆息

右等之如く不行して天下に無害行はれて大害を引出し候論のみ多き様に  
相覺申候之を要するに議事はともかくも右上木は斷然御止に相成候方妙  
と奉存候但し御取捨之上御採用に相成候實地至當之論のみ刻に相成候様  
にても仕度候

一二見一鷗之事河田左久馬申居候には彼は長州に居候節好て人を讒する  
と申説有之萬一之事有之候ては如何に候間此旨序に

閣下迄申上置吳候様との事に御座候臣推察仕候に一鷗必しも人を讒す  
るには有之間敷候得共好て人之是非を論する癖は有之哉と存候何れも  
閣下之明鑒に有之義と奉存候

一越後之模様實に不容易岩崎田崎兩人過日歸京委曲演説中御門卿も御配  
慮被爲在臣を以河田へ御謀りに相成河田より兩人へ東下申付中御門卿  
御同道にて御下りに相成申候逐一御聽取可被下候

一横山東下可致様被 仰越 極姫様も御同行可然御事と奉存候

一京師頗る靜謐御案し不被遊様所希候過日入谷氏へ御托しにて被 仰越  
候極秘御用臣謹て拜承乍不及精々心懸可申候

一大橋慎三東下被 仰付臣に於ても難有奉存候同人へ托し言上仕候事件  
も有之御聽取奉希候以上恐惶稽首

六月十三日

臣淵

亞相公閣下

四〇 岩倉具視書翰「三條實美等宛」 明治二年六月十四日

一英公子來朝之儀外國制度史官等取調へ清書之分昨夜寫取り議參の廻し置今朝各持參之筈

○外國官へも更に一通廻し置早々御返答申上候様申置候尙亦御催促但臣見込之分一冊張紙にて差出

○右相揃候上六官丈御下問に相成候者か斷然御布令のみか御評決

○前條十六日「バアクス」面會之節申入候事と存候

一正親町三條京師御取締として西上御請之趣重疊と存候今日議參御列席之處にて同卿土方等の始終御用之ケ條別紙神山方差越候分尙亦御心附之件々篤と被仰聞候様存候

一版籍返上知藩事被仰付之儀參與中木大久保 後藤東久 藤板垣凡三論有之候様

に御互に心配候得共固より孰も結局は同論之儀忠誠之處に二つ無之只緩急あるのみ然處如此徒に遷延候は列藩向背にも係り如何に付斷然十七日より御用召知藩事被仰付候事に御決有之度

○但郡縣論六七藩之處は兼御内命之儀も有之候間其廉は可成丈御旨意相立候様心配心得に候得共何分今日御決定辨事は十七日より云々に付幾日に割付候儀を初め混雜無之様御取調有之度候

○版籍奉還無之部兼御評議之通最初之一紙少々御文言替り候事と存候柳川飛驒守内話には

天裁只命之儘と申上候廉を被立外同様御沙汰不相成候は、難有と内々申居候

一福島出張之人體久我御斷りこれは庄内出張重疊可然替り之儀彌醍醐に被仰付候哉萬一差闕候は、坊城息頻りに内願出格奮發勉勵心得之よし條公へも内願

之旨旁御心得に申入置候

一 庄内轉封之儀御評議之通如何にも早き方可然民部官軍務官等御引合御  
治定有之度存候

一 彈正臺被開候儀彌來る十五日御治定之趣就而は一通之御布告有之候筈  
御治定之趣臺中か承り候得共未だ御出來無之哉拜見も不仕先日副島議  
案之分此れは數件有之候得共其内御參考に而は如何本紙は木戸の渡置  
候

一 英公使館高繩久留米屋敷之儀御評決には候得共可相成は御斷りに相成  
り右地所裡手麻布方角當りに不相成哉宇和島へ御談し願候何分此か  
御通輦之節御入用之處と存候殊に一旦御小休既に御假殿も出來有之旁  
右申上候

一 制度之儀彌御治定に就而は兼而條公御見込之處列藩の御下問可然知藩  
事被仰付候而も御暇之處は十一日か廿二三日之間と存候間是非十八日

十九日之間に出來清書之様屹度御申附に而は如何

一 教導之儀此も略出來之趣今日か幾日計り之間半日つゝ之間德卿後藤同  
局の出席候は、成功と存候

一 昨日御評議之通知縣事愈大に被遊民部御廢し等之儀今日木戸の篤と御  
談し其上廣澤の篤と々々御申談無之而は萬々不相濟事と存候同人にも  
出格盡力府縣之規律相立掛け候處又奥羽所置に至り候而も全く盡力に  
而方向相立候處に付吳々御大事と存候尤總而之規則相立候上被廢候事  
と存候

一 前原彦太郎東京御召留め之儀は不相成哉右荒々申入候

今日は不參恐入候昨日來殊之外不工合一日保養奉願上候依之心付ケ條  
六さと申入候尙御參考可給候也

六月十四日

具 視

輔 相 公

德大寺卿

東久世卿

四一 宇田淵書翰〔岩倉具視宛〕 明治二年六月十七日

謹啓

益御機嫌克被爲涉奉恭賀候然ハ過日東京に於て御布令相成候由當地へも相廻り候向後諸藩士御登用に相成候節は何等之官に御用ひにて可然哉藩へ御問合に可相成且差支無之哉も御尋に相成候趣加之に是迄御用ひ相成居人物も差支有之とて無遠慮可申出との事藩々へ御達しに相成候右は如何之御次第に候哉右様之御布令有之候上は藩に於て都合あしき人物は決して差出不申差出候は藩之奸謀か或は役に不立者に可有之實に朝廷之御爲に不相成嘆息之至に候尤右は公明正大朝廷に於て無私を示す思召かは不存候得共夫にては全く

朝權と申者失せ果て却て紛亂之基と被存候全體公明正大公議輿論を被盡杯と申事今日之流行語にて御尤には相聞候得共元來衆に謀ると申も廟堂上に於て兩三箇之御方永世不易確乎不拔之所置は箇様々と御見込相立候上無私を示す爲一應は衆に御謀りと申迄にて可然と奉存候瑣屑之事迄衆議を御採用と申ては却て不宜と存候古昔信長豊公杯の如き英雄何れも自己方寸中に於て策を決し候其謀議に與り候者は股肱數人に不過最初より衆に謀りて後決すると申にては無之衆に謀るは畢竟其萬一之失策なきを要する耳に御座候今日滿天下公明正大を看板と致し其實は私のみ實に可嘆之至に候御一新後毎度立派之御布令有之其名目に於ては十分相立居候間最早此上御布令等は餘り不出様仕度只々其實地相運ひ候處に御注意被爲在候様奉希候右實地之相運ひには虚唱之人物を退け實着之者を御用ひ有之より外は有之間敷と奉存候天下今日之急務虚を棄實を取り儉を尙ひ奢を省き小人を遠け忠良を親むに有之と存候今日才子は固より御入用

之時節に候得共辨佞口給虚唱之才子は終に天下を誤るのみ何之御役にも相立申間敷有才且忠なる者御用ひ被遊度古へ之英雄豪傑大に事を成就するは何れも有才は申迄も無之加之に至誠勤人處々之人物にて御座候何程議論は立派にても其爲人輕薄にて人望に戻り候様之者を用ひ候ては國を治むる事は出來難き哉と存候乍去大變革之世中今後は輕薄才子も間に逢ひ可申哉に候得共古に於ては決して無之事に御座候

近日彈正臺御建に相成候由難有事に奉存候然るに門脇五位杯彈正大忠とかに相成候由當地にても噂有之右様之人物出頭致し候彈正臺ならば事可知と申居候此場に御用ひ有之人物は行狀人に信せらるゝは申迄も無之人之正奸曲直を辨する識鑒ありて此人ならば必實切相立可申と衆仰て之を望む様に無之ては畢竟名のみにて折角臺を御立被遊候甲斐有之間敷と奉存候

世上之士農工商何れも 朝政を誹謗致す事は實に甚敷ものにて御座候乍

去臣も 官府出仕之身上故世上之議論耳に入候事も自然少き道理と存種々意を用ひて探り申候處實にけしからぬものにて

廟堂之御方に御聞込被遊候ては百倍致し可申と存候人口は防ぎ難き者に候得共右之模様にては政務に關係致候者眞に可畏可謹事にて右世人之不服處も畢竟政務に關係致し候者遊蕩不相止故に御座候此遊蕩御禁令速に不被行しては何程之に良法相立候ても實地總て不相運下民決して之を不信百事盡く畫餅と相成可申候

右件々杞憂之餘り不憚忌諱申上候語不敬に涉り候處も不少偏に御海容奉祈候多罪々々謹白

六月十七日

臣淵

亞相公閣下

#### 四二 岩倉具視書翰

「大久保利通宛」明治二年六月廿日

岩倉具視關係文書第四 (明治二年六月)

今日は高論何れも懇談之次第近比欣然扱舊貴藩々出願之事小生斷し而朝來申入候通り取計候定而他に異論も可有之存候得共素より自分専務處置輔相も小子へ御任し之様と申入置候事に候夫に付森金之丞事西洋歸來直に當家の頼置候而追々外國事情も承り候事亦其性直實深感銘之事に候然るに今日直様御役御免實に不忍事に候乍去是は私情不可言候得共表面より取候も議事之始より種々苦心今日現今制度之事にも日々勉勵御遣ひ立ながら御暇之所公私にとり如何と存候に付一應御内談申入候既に明朝御達しに治定候に付若同人御用濟之上とか召留には不相成候哉決而違約申にも無之候得共今日も議事之所も制度之一義に而度々出頭彼是心中氣毒に存候より右申試候早々以上

六 廿

尙々何事も無御遠慮御申越可給候也強而とは申入す候也

四三 水野忠敬書翰「岩倉具視宛」 明治二年六月廿二日

謹る書を

閣下に捧く忠敬謏劣不知と雖も

國體將に定らんとするの際聊

國恩に報せんと管見を顧みす屢郡縣の議を建言す然るに人情時勢に適せ

ざるを斷然其制を 行ひ玉はす姑く府藩縣の三治を置玉ふと 閣下の

諭あり忠敬心甚た安からず又切に郡縣の一日も後る可らざる事を條疏

す而るに卒に知藩事の

命あり退て長嘆をなす忠敬曾て一も勤

王の事業なし 國家に報する實に此秋にありと故に其職を辭して菊間の

藩を削らせられん事を請へり

朝議之を 容れ玉は、憤然之に興て尙郡縣を請ふ者あらん是忠敬の切志

にして唯赤心



國恩に報せんと欲し此議を 三條相公に獻す今敢て之を 閣下に進む願  
くは 亮察を請て切志を遂げん事を要す 閣下其之を恕せよ稽首再拜

己巳六月廿二日

水野 羽 後 守

岩倉議定閣下

四四 松平慶永書翰

岩倉具視宛  
德大寺實則宛

明治二年六月三十日

聖上益

御機嫌能被爲入奉恐悅候隨あ 閣下各位愈御安泰御奉職奉恭賀候陳は去  
る二十三日於

天前

御下問被爲在候職制之内已に民部官被廢候哉にも有之右に付あは相當官  
は私始一同如何相成候哉甚以心配仕候不被廢官知事始御人撰に不適候義  
に候は、御取替可相成義と奉存候右御人撰替相成候義に候は、御至當之

義にて候左のみの心配も不仕候得共被廢官候儀はいかにも重大之儀にあ  
候乍去 御深謀被爲在候義と奉拜察候得は御廢興之可否は不申上候右故  
に此節は是迄行懸り之 御用は取扱候得共新規伺出候事共は先手を留候  
形ちに御座候衆人不落付次第に御座候何卒 御廢興ともに速に被決候様  
奉願候扱又伊達中納言外國知事被免麝香被仰付候由承傳仕候知事被免は  
兼々本人之願と申譯も被 仰付候事故夫にて宜候得共中納言儀は實に數  
年來之勤 王之志不淺ものにて島津大納言兄中納言代より苦心其後島津  
大納言一同心配仕候義も有之丁卯之冬前も骨折況や丁卯之冬以來今日迄  
も盡力勵精之者に御座候外國之義にても不容易勤功も有之候事故今般職  
制御變更之節何卒再御役被仰付被下候様伏あ奉至願候如臣庸凡劣才之類  
にあらず萬事功者に御座候  
一寸此段内々 兩閣下へ奉言上候也

六月三十日

慶 永

岩倉大納言殿

德大寺大納言殿

四五 岩倉具視書翰

〔天久保利通宛〕 明治二年七月一日

今朝は御苦勞に存候其砌人撰一紙極内々足下より輔相小生限り被差出候義に申成し輔公へ廻し申候尤小生出會迄は德卿始へも沙汰無之様と申置候違約候得共實は今日人撰被申談候も如何と右取計仕候扱今度人撰之事は明朝輔公と斷然決し候様可仕存候廣く御尋問に於は所詮不被行事と存候此段御斷迄申入置候早々以上

七月一日

具 視

大久保殿

内々啓

四六 池田慶徳書翰

〔岩倉具視宛〕 明治二年七月四日

奉呈仕候兩三日之殘炎難凌覺候先以 尊公愈御清安御奉職奉恭悅候抑昨日は歸藩之御暇被仰出奉拜龍顏殊に以重き 御沙汰拜領物被仰出過當之寵遇實に畏入奉存候扱近日巷談風説にて承候へは不日職制も御治定之趣過日御下問之末に御座候得は大に天下之衆議輿論御參酌之上に 御治定と奉存候へは臣等可申上廉にも無御座候得共甚痛苦仕候義は萬一神祇官を被省候様之義被爲在候ては追々祭政唯一之 御沙汰にも有之前後相反し候共には無之哉殊に過日群臣を被率於 神祇官 御祭祀被行候御趣旨水泡に歸候次第に於自然人心狐疑を抱き可申歟固方神祇官を被省候扱申觸候義は路上之風説にも可有之候得とも神州一體之人氣にも關係仕候事と被存候得は甚苦慮仕候に付政府之義奉伺候は恐入候得とも不外 尊卿之義に付御内々相同度 臣等所希は何卒前々被 仰出も御座候通り神州は神教を以其基と被立候義は申上迄も無之義何卒御創建に相成度奉懇祈候

尤風聞を以彼是大政を論候は實以恐入候義に付 尊卿限りに御様子伺  
度迄内々言上候御披誦後必御投丙希入存候也恐惶頓首

七月四日

慶 德

呈 岩倉公閣下

四七 岩倉具視書翰「天久保利通宛」 明治二年七月十日

一見前略高免

- 一 昨夜大隈云々段々御苦勞全く御盡力に於今日之處無事と忝存候
- 一 扱大藏省御請惣體の事云々實に苦心極り候事に候間精々御盡力願存候
- 一 右に付異論沸騰候とも不動目的之所尤斷然心得に候間御安心可給候
- 一 待詔學士の事は今朝御決し三士の御沙汰相成候全く行違候事と存候
- 一 三藩兵隊一大隊宛御命の事承り候明日可被仰出候
- 一 輔相書狀に於隅州卿の事情被申入早々出府懇々御依頼之義明日被仰出

候筈に候實に此所に於御出府有之候は、大に定まるもの可有之無左候て

は眞に瓦解に至らんか足下にも出格御盡力只管御頼申入候

一 西郷黒田了介村田河村等四人召の事も明日被達候筈に候

一 村田新八明朝早々に入來願度存候尤退出都合に於小生を今夕か明朝か  
に可申入存候事に候咄し申置候迄也

一 今日則 召候得とも來狀之旨も候得は其上は御不參に於もよし明日は  
は必々御參可給候

七月十日

具 視

大久保殿

請

四八 大橋慎建言書「岩倉具視宛」 明治二年七月十五日

各國公使近日 輔相議定公へ面論せんと欲する事條

第一

天皇政府或は徳川又は他の大名にて鑄造せし一分銀并二分金は國內通用とし云々云々々々

右實に外國の論至當公平也抑外國の此の論を待たず我か國政斯くの如くありたき者也賈金停止の事以後を嚴禁して可也敢て負け惜しみをせず斷然外國の説の通り行政すへし是れ萬國の公法に基くの本意也復爰を疑はん

第二

外國人又は日本人より日本貨幣にて政府へ納むへき云々々々外國人をして此の論を起さしむは實に皇國の耻甚し何んとなれば從來皇國の人私しある故也政府より號令して行はしむる物を政府へ納めぬと云ふ如き私しのある理なし外國の人をして此語を發せしむは從來日本人輕薄詐僞私欲ある故也實に可耻に且外國知官事及會計副

知官事にて約せし事既に三ヶ月云々々々何そ斯くの如く因循遲疑の甚しきや實に悲歎驚愕に堪へず矣

七月十五日

慎

殿 下

四九 大橋慎建言書「岩倉具視宛」 明治二年七月十六日

謹 白

堂々たる皇國の輔相議定の重職たる者各國公使に呼付けられ内政の事を詰責せられ窮迫迷惑動もすれば周章狼狽するの態あり實に慙笑切齒と謂へし貨幣の事の如きは何を以て外官知事等より訴ふる事條朝廷三十日前に斷然決せず今日に至り猶遲疑する事の甚しきや宜しく速に決して以て外國より日を期し來らざる先きに我れより日を期し面會するか又は外官知事等をして云はしむかして可也抑外國の萬國に横行して人の國を

開くや先づ書を通し難問を云ふ其返答の遲速によつて國の強弱を察す其返書の來るに及んで巧拙を見て其政府に賢愚のあるを知る以て戰ふべければ則兵端を開き以て戰はずして足れば則戰はず是れ外夷の態也今此の貨幣如きを不決三十餘日にも至るは實に外國の輕侮を増す而已ならずや悲泣々々方今萬國の時勢に當り是れ等の事に斯くの如く困りては此上迎も六ヶ敷きに至りて奈何んせん宜しく勇斷を祈る再拜頓首

七月十六日

慎

五〇 岩倉具視書翰「三條實美宛」 明治二年七月十八日

愈御安泰令敬賀候陳は大久保木戸云々の儀昨夜臥榻中に在往事を顧省し時事を考慮するに微忠と存候儀も却る不忠と相成和合と存付候儀も亦不和之基と相成候事不少既に兩氏閑職に被任候以來世論紛々諸官解體之姿を相現し實以恐入候畢竟復古之功臣一層御優遇被遊候儀 臣殊更主張仕候

處此の如き不容易形勢に立至上は奉對 至尊恐懼不少下は天下之有志に向て不堪慙愧候兎角今日は兩氏樞要の地に立ち奮發勉勵無之ては無事に難至段は勿論に候 臣之罪責は至當之御處置被仰付度假令一旦 宸斷に被出候事と雖改る御評議相成兩氏共參議職再勤被仰付候方人情世態は相適可申哉と愚考仕候實に此時は天下を重しとし一身を輕しとす況や臣之微軀敢て顧る所に無之朝令暮改の責を負ひ天下に謝し可申候間兩氏共再勤被仰付候様御英斷之程偏冀入候前段御評決相成候上は 臣謝罪之始末は鄙表にても差出し謹る奉待 天裁候様仕度存候間只管御指揮可給候右鄙衷申述度如此恐惶謹言

七月十八日

具 視

右大臣公閣下

五一 大橋愼建言書「岩倉具視宛」 明治二年七月十八日

敬白

奉伺條々

一 殿下獨り天下の權を握り斃て已むの思召し被爲在候や否之事  
一 殿下大に長藩の人心を被爲失候而惡名惡評を被爲受候而も 朝廷の御爲め宜敷候と被爲 思食候やの事  
一 今日の恢復をなすは唯長州の神州正氣を維持する故と不被爲 思召候やの事  
一 至尊を武藏野の中へ連れ捨て奉り兄弟互に不和を生せしめ各散亂退避して遂に 至尊を虎狼の餌にする如きは忠義と可申やの事  
一 殿下斃て已むの思食被爲在候は猶可也退避之思食被爲在候は、何そ天下萬人の惜んで追慕する御舉動不被遊候や徒に人心を不和せしめ一事の後世に法とるへき事なく惡名惡評を被爲受候事は入らざる事には不被爲在候やの事

右之御決慮奉伺度奉願候實に 殿下の御爲め如何やと奉氣遣且は爲皇朝區々之情難堪奉伺候何卒審に 御趣意奉拜承度奉祈候再拜頓首

七月十八日

愼

五二 岩倉具視書翰

「大久保利通宛」 明治二年七月廿九日

明日副島出仕之旨承り候前途斷然目的云々則 小生素より御同論過日夜條公へ懇々申入候得共右十分に至りかね頗る苦心候右は外事に而もなし長に而は兎角小生薩論を取り條公を凌く杯の説紛々實に如何之事哉と一身上之得失所不論に候得共終に 朝廷天下之ため如何と愚昧小生一人之故に却而御不都合に立至り不申哉と返す、恐怖此事に候扱明日は先日々之御規則順序亦御用筋夫々一日に一つ宛に而も運候義等御決し其上大目的云々被爲在度隅州公かね而所存斷然御申出し之方可然哉と存候所詮ぐづ、に而は何迄も方向定りかね可申と存候御請迄早々如此候也

七月廿九日

具視

參議 大久保殿

尙々過日來御苦勞も被下度存候得共不存寄虛説多端無據意外に打過候事に候薩長共に一點の私心なく偏に皇國御爲を被存上候事に候處少しく運動上の見込違候迄之事に而隔意を生し候様に而は實に遺憾不可言事と夜白懸念罷在候事に候也

五三 鷹司輔熙書翰

三條實美宛 岩倉具視 明治二年七月頃

上包

三條 右府 公平安

留主 長官

岩倉 亞相 君内密

御承知之通之人物故他國へ出し候は残念京師に而保養之方相願度候官位辭退は御差圖次第神山も同意に御座候

聖上益御機嫌克被爲成恐悦に奉存候西京 御所々々も御機嫌よく被爲涉

候儘御安意可在候次に尊君方にも御勇健に御奉職珍重に存候扱岩下四位より別紙輔熙迄内願内談に候留守に而決而取計は致し難く乍去所勞事實等段々承候處只今さして是と申事は無候得とも例年此頃は眼病之由既に此頃も眼病に而引籠居り候併大事之御用向も候へは何時に而も參朝之趣に候神山とも段々示談候處何分にも御兩君に申入何とそ御差圖可伺様可然申候儘下書之儘差出し候何とか京都府副知事と申様成事に相成候は留守も甚安心之次第に候候半歟尙宜しく御賢考御差圖之上本人に申聞候と存候荒々取要のみ申入候也恐々謹言

三條 殿

輔 熙

岩倉 殿 内密御直披

此附紙附け所不明に付爰に記し置候事

岩下左二方輔熙迄内談書付暫御暇願之事

印

前同斷

兩道之内いづれの方可然哉との内談に候

印

私事難有被 召出無量之奉蒙 朝恩奉報道も無之日夜不堪恐懼候然處昨年七月初の持病相發今に全快不仕折角加養仕候得共急に快氣之見當も無御座就るは甚以奉恐入候得共其當職御免被 仰付位階返上仕度奉願候左候は、一年程も安心篤と養生仕候は、必元氣も復し可申と奉存候間其上は何様共似合之勤務仕度志願に御座候御多端中深奉恐入候得共廣大之御仁慈願通速に免職被 仰付被下候様奉仰願候誠恐頓首

七月

岩 下 左 二

御一新初發より私事高官に被召出不堪恐懼候得共折節未だ諸國人材も不顯候故不得止事奉命仕居候處昨年七月初の持病強相起り御多端之御時節恐入候得共引籠養生仕少々快氣を得出勤仕居候得共兎角全快に不致候處亦々先達之相起候に付引籠精々加養仕候得共急に快氣之見留も無之候

間何共恐入奉存候得共此涯安身養生仕度候間何卒半季歟一年程御暇被成下候様奉懇願候

一時病強相起候由縁は兼る痲癩之持病有之候處一昨年航海中炎熱難堪右之疲勞も不休内上京無程 御一新被 仰出晝夜之勤務引續大坂兵庫と懸け奔走仕隨而心配も仕候故と奉存候間隨意延氣加養湯治等仕候は、必快復を得可申と奉存候

一昨年來辭職奉願度存居候得共御人少之故を以默止居候處當分は 御留守中に御用も少く且先達被免候人々も多御座候間乍恐差而 御用之御差支も被爲在間敷と奉存候間奉願候

一私事可願念父母も無之候間快氣仕候上は何方何様之御用被 仰付候而も相厭不申候間似合之儀は精々勤勞可仕志願に候得共病身故不任心遺憾之至奉存候

一御留守中御用も少く勤暇に養生も可也は調候得共奉職仕居候而は全安



心に至り不申十分之加養相調不申候間千萬奉恐入候得共速に免職被  
仰付被下候様御執成奉仰願候

七月

岩 下 左 二

五四 岩倉具視書翰「天久保利通宛」 明治二年八月四日

懇々御細書忝一見扱昨夜は三氏御會同前途大事云々惣御談合之處廣澤  
にも殊之外に同意無腹臆段々被談候事爲天下重疊此事に候實は始る安心  
仕り萬々恐悅欣然候昨日小生不參眞に風邪加ふるに例頭痛無據德卿招き  
全體御規則萬事御評議之事別段早參にても致一同打揃早々に御取極之事  
願度無左候は何事も方角不相立日々小事に奔走而已と存候に付暮々何  
日何字と御取極願度小生風邪も一兩日に快方可至と存候間御治定次第押  
候も參仕之旨申置候事に候幸之事明日は必參仕可仕存候早々如此候也

八月四日

具 視

請

尙々昨日條公回狀渡邊歸來奥羽物情云々如何と昨夜德卿へ承り合候處  
格別之筋にも無之由に付小生今日保養仕度今日は令不參候併尊書明  
日は是非參仕候様七字々にてなくても云々若哉今日明日行違無之哉今  
四日之御心得に候は十二字比必押る參仕候否一應御一筆御願申入候  
早々以上

五五 岩倉具視書翰「天久保利通宛」 明治二年八月十三日

今日英公使出會の所何も別條無之松浦岡本凡る細處辨別申答に付よは  
と感心に大に心得に相成忝存候との事也尙又巨細承届度明後十五日  
十字寺島松浦岡本等可出頭頼に付右即坐治定致し尙又兩人持參圖面類  
今日借用致し置明後日迄寫し置度との事也其上英軍艦探索に遣し候と  
の事に候今日不都合なく御安心可給候

一 扱大體政府見込如何と尋に付唐太シクシラユンヌコタン兩所の良民貳三百人計  
 移住尤開拓外務等々夫々出役只管靜謐を旨とし條理を以て應接順序を  
 追ひ開拓心得にて此地には兵隊を不渡先雜居を目的と申入候所至極可  
 然との事なり夫より宗谷に兵隊根室に兵隊其外出役亦石狩の事夫々申  
 聞候得は當年夫丈の御運ひ出來候は、實に重疊何卒此義の不替様早々  
 御手を御下しの様存候旨也一件よほと入念心配致し居候様子に候  
 一 明日は開拓一件斷然御取極の旨至極御同意申候今日は三條へ早朝書狀  
 にも申入候定る御一覽被下候事と存  
 閑叟大納言開拓如元斷然被 仰付凡て開拓局にて評決而して被伺出候  
 様被命度附ては寺島大隈船越にても夫々御用掛被 仰付萬事一日も速  
 に運ひ候様被命度今日も船の咄し彼是有之候所詮外務兵部大藏開拓等  
 十日計も打寄示談に相成候ては當年の渡海は六ヶ敷と存候  
 一 井上聞多も早々被 召宗谷迄の出張被 仰付候方と存候同人事大隈へ

昨日承り次第も今朝三條被申入置候既に爲國家足下斷然御決心御願立  
 も有之候様程の大事に付右替りとしる東久同人抔被命可然と存候事に  
 候、井上出張に候得は會計に  
 候も都合宜敷との事に候

一 吉井書狀の事承り候是を招き早々可承と存候  
 一 パークス唐太新聞段々取調候得共手元に無之全く宮中開拓書類文庫に  
 入置候事と存候乍折角明日迄御待可給候  
 一 先時早速御答可申入候處兎角頭痛困苦乍意外失禮候隨分勉勵大底は押  
 る出仕罷在候得共折節持病頓發には困り切り申候  
 早々御請迄如此候也

八 十三

對

大久保殿

五六 岩倉具視書翰

「大久保利通宛」 明治二年八月十七日

昨日御懇書之處正三卿集會中失禮又は午後は條公始中山集會彼是にて御請不申入意外之事に候

一大隈集會云々何も承候尙此一段御盡力被下度候

一大木御出會見込書出來次第御廻し之旨承候

一同人話鍋島人高柳忠吉出納正云々尙々副島大隈へ可談と存候

一知縣事の事は尙御評議の上と存候

一丸山之事決して捨置候には無之土方取調中頻に催促致居候事に候

一此節之事條公小生憤發之義尤盡力心得に候但此比に至り御舊藩論小生の事頻りに異論之旨素より愚昧無致方義に候得共一方より只々薩論と

被唱候義嘆息の事にて實に心中不安深恐怖罷在候

右早々御請迄如此候也

十七日

大久保參議殿

具視

五七 中御門經之書翰

岩倉具視等宛 明治二年八月廿日

右 大臣 殿

岩倉大納言殿

德大寺大納言殿

追々穩冷相加候處 聖上益御機嫌克被爲渡恐悅至極存候當御地御靜謐  
大宮御始御機嫌克被爲在候間御安慮可給候次各位御揃御勇健御奉職恐悅  
存候經之にも道中無障去十一日歸京仕其後日々勤候間乍憚御放念可給候  
誠滯在中は種々御面倒申入恐入存候然は御人撰弁官已下夫々申渡各御請  
と姓實名等は田中五位明廿一日當地發足歸着に付彼人の委候尙歸着之上  
御聞取可給候此段申上置候歸京後早速可申上之處取紛御無沙汰恐入候刑  
部省御廢止之事本省へも御達に相成早速可發表様海江田々も申出候へ共  
是迄仕掛之義夫々書取等可相渡に付只今被廢候は達方差支如何候難取

計旨吉井申出不得止事次第に候間暫時見合仕掛件取計濟次第發表可仕候  
左様御承置可給候尤横井件は百日御猶豫之義に候間是は京府へ可引渡旨  
に候其余之事件取計濟迄に候尙又追々可申伺義も可有之候へ共先右等之  
義申上度如此候也

八月二十日

二白監察司被廢止之義は申達候左様御承知可給候不正之時令御大事御  
保護專要存候大亂書可被免候也

五八 岩倉具視書翰

〔大久保利通宛〕 明治二年八月廿五日

大久保殿

具 視

不及御答

昨朝密示の旨を以て條公は行向示談同意に付書狀に於て政府へ申入候處  
足下乍御不參各同意返答依之東久世へ出頭小子は不參候事に候然る所

條公にも東久所詮御請申問敷との事よほと不平嘆息眞實退身覺悟罷在  
候先以て斷然斷り又眞に所勞臥臺の儘懇々申入候處存外堅く困苦専ら  
被申候處は草莽徒西洋深醉説右様の者御登庸不可然尙亦及懇談候處御  
一新の際内外混雜殊更外國の事御大事とて兵庫より大坂横濱都て東久  
御用被命彼是苦心外國人引合懇親も有之候處今日と相成世評に付俄に  
御譴責況や自分不正の覺え無之最早是迄と決心の旨吐露の次第に候得  
共追々氷解にて此上は御請申上北地に投身御奉公申上候との事極々内  
々申入候

一 島岩村兩士岡本を昨夕招迅速出帆の事東久の事夫々示説の處來月五日  
は揚碇の運に候

一 東久明十日 召表向被命候開拓局にて一同集會の筈に候町田にも明日  
被 仰付候心得に候也

一 昨朝黒田出會何分兵部省の處太切亦西郷召云々又吉井内談の筋も有之

旁斷然北地は止め申候併來春は必出張被仰付度心得に候  
一唐太の處御大事不可爭此所は谷元丸山岡本等斷然任して出張の事御盡  
一方可給候其上は谷元岡本文にてもよろしく黒田にも申入置候間谷元の  
處吳々御説得可給候

一前途御目的云々條公より尙亦副島に案文被申入候筈にて候同卿今日出  
仕其中發表と談し申候事に候

一今日退出の後前原に行向候心得に候  
右内々足下限り御心得迄に申入候御莫言可給候早々以上

八月廿五日

大久保様

机下

東久尤長官と御同意候也

五九 三條實美書翰「岩倉具視宛」 明治二年八月廿五日

納言 岩倉公

實美

不勞御答

御安泰奉賀候過刻は御書中件々拜承候扱東久世に相渡候書取別紙草案入  
覽候無御遠慮御加筆願度御相談旁如此候明朝御返辭奉伺度候頓首

八月廿五日

北海道開拓長官被 仰出事務總に御委任被遊候に付御出張之上斷然御處  
分可有之候抑貴殿曾て宇内の大勢を御看破有之敢に 御國辱を醸成無之  
は勿論之義に付萬一邊境隔絶より物議沸騰有之候とも政府夫れか爲めに  
狐疑を生し貴殿之御困惑に立至り候様の義は誓ふ無之様可致候間北地日  
に開拓 皇威月に光輝候様内外適宜之御處置一途に御盡力可被奏成功候  
事

六〇 岩倉具視書翰〔大久保利通宛〕 明治二年九月二日

彌御清榮欣然候扱今日は實父正忌にて令不參候依之昨日參賀午後三條德大寺等打寄數ヶ條懇々談し置今日夫々御相談と存候前途御目的宸斷云々之邊爰に至り候扱は尤早き方可然と十分存候添島一紙の方今少し不出來之由是も宜敷御談し可給候隨而昨今年御處置降伏藩々御沙汰書悉皆御取揃今日中德卿を御渡被申筈に候御同列中に亦宜敷御配慮可給候

按察使より申立仙臺件開拓より申立名醫の件會津血食御處置にて同藩降伏人御都合より大藏見込

右等も即時相運ひ彼是に付隙取候扱は如何と存候少生之所も右御張出し之所迄は只管苦心之心得に候早々以上

九月二日

參議大久保殿

具 視

不待貴答

薩長兩老卿西郷等 召之義等閑に相成候扱は不相濟と存候御賢考可給候

六一 岩倉具視書翰〔德大寺實則宛〕 明治二年九月十日

皇國前途の事大に規模を定められ

詔書云々小生には兼て申入候通りに候昨朝於條公被決の處今夕は參議衆御示談御決し可給候隨扱は參議中え申入置候謹慎の輩所置振早々取調有之度出來次第何日御發表と申事迄御談し願度候

小生愚存案文上置候條公副嶋氏の分は條公所持に候

薩長兩老卿是非々々出府有之今暫らく 輦下に在勤猶兩輪たる事實に急務と存候同上西郷吉之助等依之 召の 勅使小生には昨日申入候通り如何様にも進退可仕と存候條公見込も有之事參議中得と御談し是も今日に

亦は速に被決度存候

賈金云々薩土の事昨朝條公方に而談しの筋如何や御議し可給候

外二ヶ條書代筆何共恐入候得とも繁多愚筆所詮辨し不申より不得止如

此候乍去漏洩は決し亦無之候此段は御懸念無之様願存候早々以上

九月十日

具 視

德大寺殿

書類九包添

六二 岩倉具視書翰「大久保利通等宛」 明治二年九月廿一日

前略昨夜條公にて議する所榎本以下之御處斷然佛談判後と決す但し素より死罪然

りと雖も外國談判 而して功臣賞典と慶喜以下御處置と此二件は一日も速に

重事に付此如也と 可被行との事に決し申候小生同意爰に至り候小生此外は所不及盡力に候

内々申入候明日は定亦條公公然御談しと存候御心得迄早々如此候也

九月廿一日

具 視

大久保殿

副 島 殿

御直披

六三 德大寺實則書翰「岩倉具視宛」 明治二年九月廿三日

先時條公來駕復古功臣賞典別紙之通今日三木等と御決議に相成候就亦は

廣澤之處大久木戸祿は同様にて位階不被下方宜候哉矢張三人同格に被

仰付候方歟 閣下へ可相伺旨に候且山内之處置過日云々に付復古功臣被

賞之砌更に被賞候旨御返答に相成居候事故今度被賞候方と存候左候は、

尾越藝等も被賞候哉此儀も相伺度候朱圀の分御止に候成瀬以下之處御賞

詞の御沙汰書并金千兩計被下候亦は如何に候哉御相談申入候間明日迄に

御答相伺度候也

九月廿三日

實 則

岩 倉 殿

六四 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕 明治二年九月頃

昨日は御苦勞奉存候扱僕所勞兎角快方に無之外邪之上に胸痛を發し所詮今日も參勤相整不申實に恐懼之至極に候得共不參候急務左に申述候

一 黒田良助開拓次官出張の事彌從僕内意申聞候積り今夕相招候長官澤の處も黒田同勤

異論無之哉萬々一被仰付候後彼是有之候否は甚以不宜候間澤へ御尋の上黒田へ御沙汰可然歟

一大隈大輔の忠告之事熟考仕候處彼人の性質御承知之通故所詮至誠を以て諭候迎感伏は無覺束歟僕考に御互より懇々閑叟の申入從同人懇諭に相成候方本人の面折よりは可然候半歟と存候御相談申候

一 皇后御東下之事大典侍大乳人又中山等へは過日僕を一應申置最追々時

箋付

箋付

節も冷氣に相成候間隙取候ては寒天に可相成候間急に御發表可然存候猶德卿御申合にて御伺定御發し之事早々御取計奉願度候先は要用計一筆申陳候大亂書高免可給候也

實 美

岩 倉 殿

(岩倉具視付箋)  
條公返事

付 矢張今夕黒田御談し可然元々澤卿異論有之間敷乍併德卿へ申入今日寺島に示談の事故其上速に澤卿へ内談頼遣し可申存候と申入置候何卒々々御勉勵寺島二字被召候は、澤三字に御招き御内話之様希上候

箋付 此條は如何哉と申入置候尙尊卿に御談し申入候上返事と申置候賢考次第治定仕候

付 (明日條公參勤候は、其上夫々順序相立示談可發不參候は、小生參朝



兼(懸出頭と申置候事に候

六五 大原重徳書翰

岩倉具視宛

明治二年十月朔日

亞槐公閣下内々

重徳

夜分甚御面倒とは存候へとも何卒得拜顔心事申述度存候義は餘之義に無之彼過日建言申述候横井平四郎斬殺之罪人御刑罰之一件に候獻言に申上候通り此者共を被行刑候ては人心不平を抱實以 朝廷之御爲筋に左右なく一命を捨相勤候者無之様可相成とそれのみ 朝廷之御爲奉察候に付言上候事に候中には助命を申出候者も御坐候へ共實に無證據にて官人を切候者故御法を御用に候は、斬首梟首等にも候歟刑律巨細不辨候間刑部省言上之通に候半なから愚直重徳申願候は事實不分明之事に被爲刑候儀は如何にも恐入たる御事に存候事實不分明にては罪状も難被定譯柄と奉存候然れば横井之事跡分明に相成又今一人も御捕に相成候上にて愈横井に

無罪なれば切害候者は眞に罪人に候若又横井に可惡事も顯はれ候時は彼者共は無罪之者に候只今被爲刑後日に横井之罪状顯然候時は無罪者を刑し殘念不惑に被思候共不相及事に候半す哉御預之儘に被差置候而後日横井の無罪且今一人も御捕に相成候上にて利派に被爲刑候とも不遲御事にて人心も不平なくと存候箇様にござへ書并へ候はいらぬ事とは存候へとも箇様之次第右被爲刑候ては 朝廷之御爲に一命を擲候はいらぬ事じや抔と御爲筋を働く者の無き様に成行候を御案申上候事は中々筆にも辭にも盡される事には無之殊に近頃は大人に人心不平を抱き候様に愚考仕且は外夷に國の戰爭抔昔は餘所之事にて馬耳にて濟候得共只今にては隣國同様の事にて何時何事を持た候も難計候御時節に候へは殊更國內の人心を頼に不被遊候ては難を防事も難相成と是又心配御案申上候數の内に候何卒此邊をも被合思召人心の悦伏仕候様と存候へは彼者共を御預けの儘被差置候様偏に奉希候事に候也

十月朔

二白此儀御歸館御待可及言上處に候へ共御草臥の處へ申上候とも中々御邪魔と恐入候間不文なから相認め罷歸候何れ明早朝罷出巨細可申解候也

六六 宇田淵書翰岩倉具視宛 明治二十年十月十七日

謹啓時下新寒相催候處 閣下益御清穆御奉職可被遊奉恭賀候然は過日閣下御賞典結構仰を被爲蒙候趣拜承仕臣等に至迄難有仕合に奉存候恭賀不過之候

過日來當地市民少々沸騰之氣味有之長官公府へ御出張にて御説諭に相成臣も兩日共陪從仕候松田榎村等必死盡力市民等頗る承伏之體にて既に行啓も先無御滯被爲濟恐悦之至奉存候右市民沸騰にも種々區別有之鳩居之倅久兵衛伊勢久之弟等を始とし百名計り最初府へ歎願に出候是徒は眞に

愛國之赤心より發し萬一遷都に相成候ては一大事と存彼肴屋八兵衛後光明帝之茶毘を御止め申上候先蹤を追ひ此時に當り町人なからも傍觀致し候亦は不相濟と存込候より起り候處府之説諭に因て速に承伏致し候又上京壹番組三番組等には尤頑固にして是は畢竟 行啓を御止め申を名として窮迫を訴へ御救恤を催促致し候趣意に被察候尤先達而御救恤御沙汰之趣有府に於て申聞有之候得共小前之者此趣承知不致者も可有之哉と被察候に付猶又右難有御趣意之程懇諭有之先承伏致し候趣に相見へ候尤右救恤は府に於て至急手を下し候運ひに御座候其他或は張紙之爲めに煽動せられ又は隣町より誘引せられ候町も有之由に候乍去總而上中下京六十五組之内彼是申候町は上京に於て四五組下に於て二三組位ひ之事に御座候今日に至り先何事も無之此段御省慮被遊候様奉希候右 行啓之事彈正臺よりは御延引に相成候様強て申出候へ共長官公斷然御不承知にて臣等に於ても至極難有奉存候尤府并兵部省も御延引は不宜と申論にて先々程

克相運ひ申候右始終之次第長官公より被仰遊候義と奉存候得共猶又内々爲御心得言上仕置候返すくも可惡は艸莽不逞之徒張紙等を以愚民を煽動し政府政事之邪魔を致し候者に是等之者共其筋に於て隨分探索致し居候へ共即今手に入不申趣に候

大村兵部大輔手疵之事近日之容體傳聞致し臣も元醫生之事故其吉凶大抵は前知致し實大に案し居申候乍去今日之間も事なく候は、取續出來可申哉と相考申候是等之人物はよし不具と相成候共一命計りは爲保度爲國所祈候稽首再拜

十月七日

臣 淵

亞相公閣下

六七 岩倉具視書翰〔中御門經之宛〕 明治二年十月十三日

本月七日御認御書十一日拜見候天氣平穩東西兩京御靜謐御互に恐悅此事

奉存候中宮にも無御滯御出與恐悅奉存候誠に此事に就ては京都市民議論紛々素より左も可有之筈に尤之譯と存候其間に草莽之私論も種々相加里人心沸騰實に一朝一夕之事に無之と千萬遠察仕候尊卿斷然不動夫々御説諭に御出與に相運候儀御盡力之段一同感伏罷在候一時は嘸々御配慮之事と拜察仕候

一知光院東上之事云々中宮御依頼之御事も承知致居且兼々夢中にて一度は富士は見たしと之内話も有之候儀故小千東上相成候ては如何と申入候事に候此邊は尊卿に於て御商量尙希入候  
右御返事迄早々如此候也

十月十三日

具 視

中御門殿

六八 島義勇書翰〔岩倉具視宛〕 明治二年十月廿九日

岩倉具視關係文書第四 (明治二年十月)

三百二十三

以書狀致啓上候

公益御機嫌能被成御座恐悅奉存候然私儀先月廿日御地出立海路無滯同廿五日函館表に着船諸般手配之上本月朔日同所出立同十二日錢箱表に到着兼而伺濟之通札幌邊の官舎并役邸等取建開拓之御基礎早速相立候心得に御座候處兵亂後諸場所備米等少しも無之其上北國邊の廻米も無之處降伏人等莫大之人員入込候儀に付必至と諸人難澁致し居候折柄に而僅に當役員上下七拾人餘之食料すら差支候處御用廻米も未た着船不致且諸職人等給料總而正米ならては相辨不申如何共可致様も無之甚當感罷在候殊に蝦夷第一之場所石狩小樽高島等之三郡兵部省管轄に相成居候義に付詰合之内重立候井上俊次郎其外之もの兼而兵部省長官船越大丞其外之規模とは相異り再應大體之御趣意柄及懇談候得共心得違と相見へ兎角御失體之事而已尤從來弊風に染み居候頑愚之民心又督責之不行届所も可有之歟着掛けの諸事不都合之義而已當役々何れも憤懣致し居候得共最寄に管轄

之人民も無之御用反的差支居り此儘に致し置候而は開拓之御趣意迎も不被行候に付小樽高島之二郡は開拓使に被相附右之代り地として濱益厚田之二郡を兵部省に被相附度右之義に付而は委細松浦判官岩村權判官の申上候儀も可有之に付可然御申上被下度此段可得御意如此候也

十月廿九日

島開拓判官

岩倉公

義勇花押

執事御中

尙々本文之趣は何分にも急務之義に付吳々宜く御申上被下度候也

六九 三條實美書翰

岩倉具視宛 明治二年十一月十三日

寒威増加難凌候彌御安泰奉賀候併昨今御不例如何厚御保護奉祈候然此度大木大隈諸輩御賞賜被仰出候に付昨日大久保廣澤等心附にて徳大寺副嶋等格別勤勞も有之候間同様御賞賜有之度申出候至極尤之義余り手近

に不氣付に打過候何卒相應御賞被 仰出度就るは別紙之通り取調申付候間御一覽に備候御心附も候は、御示願入候萬里小路之處は如何哉格別功勞と申程之義は無之候得共昨春來精勤にも有之候間同しくは聊に亦も御賞有之度長松辨心付に有之猶御相談申候別事ながら三條西儀老年にて西國に下向始末節を貫き候事功勞は無之候得共御一言之御慰勞も賜候は、誠私輩に於るも感泣仕候是又無御服臟御示希度候  
 一品川彌二郎儀彈正御達申付候處廣澤より暫御猶豫願度旨頻りに申居候先刻之御書中にては彼是不容易御苦慮も有之候趣如何様之情實に候哉  
 今一應御内示願度候  
 一鹿兒嶋藩知事御暇願書差出候右は如何被 仰付可然哉愚案難決御相談申候猶御考慮承度候  
 右は差急候事件乍略義以書中申入候明日御回答奉願候吳々御所勞御加養爲朝野奉祈候勿々謹白

十一月十三日

岩倉公

實美

七〇 岩倉具視書翰大久保利通宛 明治二年十二月三日

足下御内願之事條公示談候處大に可然被存候に付彌明日木戸同様御用にも參向被 仰付候治定之處御心得迄一筆申入候尤廣副前等朝臣同意何れも可然決議に候早々以上

十二 三

具視

大久保參議殿

不及貴答

尙々木戸御出會御都合もと一筆申入候也

七一 岩倉具視書翰大久保利通宛 明治二年十二月十七日

岩倉具視關係文書第四 (明治二年十二月)

三百二十七

尙々木戸氏には既に今日御發足之由乍御面働大久保氏明日御傳給候は  
、忝存候以上

今度依御用御歸國被

仰付嚴寒之砌實に御苦勞此事に奉存候乍併

皇國前途之事はより彌御基礎被爲立候根々元にして

兩賢兄此上出格御盡力之義千々萬々懇願仕候此麤品如何候得共御道中用

にも相成候は、本懐之至に候以上

十二月十七日

具 視

大久保參議殿

木戸從三位殿

不及貴答

# 明治三年

## 一 中御門經之書翰

三條實美宛 岩倉具視宛 明治三年正月九日

彌御安泰恐悅存候陳は去六日吉井監督正入來件々承候同七日山本復一郎  
入來件々承候右に付納言御猶豫願候へ共是非御受可申上旨吉井の段々被  
仰越候趣過分之儀不堪恐縮猶以御受も難申上存候へ共彼是申立候ては強  
情申上候様に相當り候ても恐入候間先々今度は御受可申上猶又御改政之  
次第により可願哉も難計候へ共押申上候儀恐入候間御受仕候旨幸西川  
一平東下に付委細同人へ申入候事に候然處七日山本復一郎の御内評之趣  
密に拜承何共恐懼之至素より微力不才昨夏も段々御斷申上候次第併段々  
之仰背難く留守長官御受申上候得共實に不當其任只々恐懼仕候折柄今度  
納言宣下加之府之事迄御評議之次第承何共、恐怖之至迎も御受も難仕

實以當惑心痛仕候其上昨年  
皇后御發途人心動搖之節兼御内約之通り當年大嘗會に付是非  
還幸可被爲在旨を以漸鎮撫仕候事に候全京都府失言とは乍申三月  
還幸と而已人民は存込居候折柄急に  
還幸も御六ヶ敷趣に承扱々愕然仕候依御内命京府出席之節も當年  
還幸之事申諭候事に候然るに右 還幸之儀は三木衆には不被存彼是議論  
も有之全 還幸は無之方に被爲在候哉に被爲有誠に以遺憾之事に候右等  
京都人民へは申諭則天下に相傳候儀に有之候處自然右様之儀に 還幸  
は不被爲在候ては實に天下に信を御失ひ玉政も此限りと深以悲歎仕候縱  
令三木衆不承知に候へ共天下に信を御失ひ此迄に被遊候王政一時に破候  
様に成行候ては千歳之遺憾不可謂之儀と存候何卒是非 還幸之御盡  
力天下に信を御失ひ無之様伏奉願候乍去年凶作に御用度欠乏 還  
幸御六ヶ敷哉にも承候自然右丈之儀に候て何卒明了に昨年凶作に付御用

度欠乏加之諸國窮民御救助等に御入費相嵩又々 還幸之御入費迄は逆  
も御手不被爲届次第不得止暫 還幸御延引之旨明に御布令有之候は、少  
は人心も可安哉此儘に御遷延相成候ては人心難治實に天下之御大事と  
存候に付切に苦慮仕候右等之邊も有之御内評之通り府へ出仕之儀は何國  
迄も御斷申上度候昨秋出府人民へ申諭候廉不相立候ては何之顔ありて都  
下之人民に面を合候哉と實に恐惶之至に候何卒可然御熟考 還幸之儀御  
取計幾重にも奉願候若不叶儀に候は、明に御布令有之度何分信を御失ひ  
無之様願度候賈金御引替之件に付も人心不穩折柄に候へは自然遷都相  
起候ては不容易事に可立至哉と苦心此事に候昨夏は堅大嘗會に付 還幸  
之事御約申人民へも右を以申諭候儀今更御變約に實に 朝廷信を御  
失ひに相成已來御政令も不被行可成行必然と存候間吳々深く苦心仕候何  
卒爲天下御盡力一度  
還幸被爲在候様伏奉仰候夫共急々には御六ヶ敷候は、明に御布令之様

右二ヶ條之内是非御決定願度存候實に杞憂之餘り諱忌を不願赤心吐露御  
兩公迄歎願仕候今度右御内評之邊承大に苦心在職に不堪怨歎仕候外無之  
候何卒く信を御失ひ無之様宜く御賢考願入候今般信を御失ひ有之候て  
は取戻し不相成儀と過慮仕候に付失禮之事而已申入恐入存候多罪眞平可  
蒙海恕候御多端之御中恐入候へ共右兩條之内速に御決定早々否可被仰候  
何共苦心之至に不堪候間吳々宜御賢考否哉早々御答伏る希入候先は右申  
入度迄早々如此候也

正月九日

追ふ苦慮之餘り實に失禮之段恐入候得共爲國家何卒宜様と存候より種  
々毎々申上恐怖不少候今度之儀は不容易御儀と存候間吳々可然御賢考  
奉仰候也

此書中認候へ共脚便に不は不安心に付見合今度吉井へ託候日附相違御  
斷申入候也

經之

右大臣殿

岩倉大納言殿

至密

二 中御門經之書翰

三條實美宛  
岩倉具視 明治三年正月十三日

副啓

別通至密之儀脚便に不は心痛幸今般吉井歸東に付託候實に別紙申入候次  
第不堪杞憂失敬且不文前後無正體恐入存候宜御斷申入候何分爲 朝廷御  
宜様と存込候より失禮之事而已申上恐入候へ共可然御賢考願上候且過日  
西川を以申上候當京學校并諸官省之處御廢止之名は御止誠形計に不も其  
名存候様有之度候左無之不は都下人心動搖無疑候其節鎮撫之道無之若一  
度都下人心動搖候不は乍ち諸國に差響不容易事件に可立至と深々苦心仕



候當節人心實に御大事と存候併當京之儀は御願慮無之儀にも候は、無致方候得共過日來御沙汰にも人心大事と之御尊も承候儀只今惣而御廢止に相成候は、遷 都論大に主張人心を動候は必然と存候何卒、御熟慮爲國家平穩之様奉懇願候

一彈臺中之事并草莽件吉井へ委細申入置候間同人方御聞取否御答至急伺度候不容易事件存候間篤と御聞取早々御答願入候尙萬々吉井方可申上何も可然願入候先は早々不備頓首

正月十三日

經 之

右 大臣 殿

岩倉大納言殿

副啓至密

三 中御門經之書翰

三條實美宛 岩倉具視

明治三年正月十七日

聖上益御機嫌克被爲渡恐悅至極奉存候各位益御清昌恐悅存候陳は別紙豐岡已下申立小生迄被差出候間御回し申入候過日吉井歸東に付右之邊も申上候へ共何分當京は 國母も被爲在且御代々 山陵も被爲在根本之御地實御大事と存上候當地人心動搖仕候は天下に響き候儀不容易儀と奉存候既に此頃諸藩士草莽之徒 還幸之事可申立若御採用無之候は、東京燒拂攘夷可致抔專同居候由に候都下人民は唯々 還幸而已御待申居候折柄に候得共學校御廢相成候は、大に人心に關係可仕と深苦心仕候府之學校に被遊候共矢張御入費は可相掛而人心は動搖仕候は實に不容易夫より小々之形にても大學校之名相存候は、大に人心も安堵と存候且は別紙にも有之候通り府之學校と相成候は、宮華族邊も如何と是亦心痛仕候何卒、大學校と被存候様偏に奉祈候東西一視之御布令も相立候様兩全之御良策伏る奉願候諸省之義も過日西川へ申入置候是亦名は相存候様奉願候一時 遷都之形相顯候は人民鎮撫之道も無之何共恐入困苦之至に候名

分相立人民承服仕候様爲國家千祈萬禱仕候尤無御助才義愚意申上恐入候  
へ共當京は御打捨之様に被伺候邊も有之大に當惑仕候事に候何分にも東  
西一視之御趣意貫徹仕候様伏而奉仰候何も可然御賢考幾重にも奉願候先  
は早々如此候也

正月十七日

經之

三條殿

岩倉殿

四 岩倉具視書翰〔大橋慎宛〕 明治三年正月廿二日

足下も亦甘言と言んか然れ共只今之一書實に深情至れり盡せり不堪感銘  
也冀くは自今益直言補佐有ん事を唯北行遺憾而已早々以上

正 廿二

對

大橋殿

五 大橋慎建言書〔岩倉具視宛〕 明治三年正月廿二日

謹る開拓の着眼大綱の順序を列叙し以て

至尊玉座下に獻せんとす竊に先づ 殿下に呈し 尊慮を伺ふと云ふ

上書曰

臣慎誠恐誠惶再拜稽首敢て恭く微衷を閣下に上言す粗漏の多罪恐ら  
くは

震怒に觸れん幸に若し 寛宥を蒙り或は採用を賜はらは何ぞ感泣に堪ん  
臣慎謹る案するに方今

皇政一新 廟算固より不可窺と雖凡そ萬機或は

神武の創業に基くに似たり抑日向の國は 皇國西南の極にして 神武是

より起り 親征を以て 神威を東北に耀し闔國靡然として皇風に服す

るの大基を立つ爾來 歷代治亂の餘武臣敢て 朝權を落してより遂に

皇都をして徒に平安城に偏安せしむる事久し

陛下始て 皇運恢復の今日に遇ひ毛利島津三條岩倉山内等の功勞に由て

大權一つに歸するを得たり於是 陛下東幸江戸を以て東京と號し蝦夷

地を分裂して十一州とし以て北海道を置く夫れ北海道は

皇國東北の極也嗚呼

神武國を西南に始め 陛下之れを東北に終ふ 實に 神武創業に基くの

盛業也然に方今宇内各國の形勢波濤萬里を隔絶すと雖猶平地比隣の如

し

陛下宜しく徒に東京に偏安すべからず眞に

神武の大業を終へ以て各國と並行すへし宜しく 先皇の神威を墜す事無

かるへし何をか 神武の大業を終ふと謂ふ北海道開拓の成業是也今や

開拓使を置き將に大に基礎を立んとす固り其の宜き也然と雖其の寇敵

なきの地なるを以て忽かせにすへからず

陛下宜しく 神武日向より起り亂賊を 親征するの勞に繼ぎ 親臨以て

北海道を開くへし宜しく歲月を期し北海道石狩國へ 行幸し以て北京

を置くへし是れ

陛下 神武と皇國を終始し以て 神武の志を成す所の大業也願くは 陛

下斷然北海道に親臨するの至誠を天下に示せ然れば則天下誰か敢て感

憤激勵せさらん北海道の開拓豈神速ならんや蓋し北海道を開くの急務

たる所以んの者は山靺滿州に通し最清國と深交を結び同心戮力各國の

膏血を北京に集め以て我か西南の七十州を培養し以て大に爲す事有ら

んと欲する也然れば則 陛下内外を制御するの道是より開け 皇國各

國と並立するの盛事是より起るへき也其の開拓の事業を興すの順序に

至ては臣聊別に大綱を述ふる事二十餘事あり冀くは下して之れを政府

に衆議せしめよ臣至愚の千慮と雖若し大業に一得あるを得は何の幸か

之れに如かん 臣慎誠恐誠惶再拜稽首謹白

正月

開拓順序大綱

- 一 闔國の全力を北海道に盡し山靺滿清始め各國の利を北京に纏め以て闔國を培養する目的の事
- 一 札幌郡を本とし石狩郡小樽郡高島郡之れに繼ぎ其他の諸郡之れに繼ぐの順序を以て蒼生繁殖の道を施行する事
- 一 東海東山北陸三道の府藩縣高萬石に付き十人つゝの良民を移住せしむるの法を立つる事
- 一 西京の華族移住の事
- 一 中下大夫移住の事
- 一 諸藩の士族千石以上の者一藩に一兩人つゝ移住の事
- 一 札幌石狩の土地を規畫し移住の士民に邸宅地暨ひ開墾地を賜ふ事
- 一 移住の士民職務の勤怠により褒貶勸懲の規律を正す事

一 伊勢神廟遙拜殿造立之事

- 一 神社は勿論佛閣寺院と雖聊忌み嫌ふ事なく大に造立の道を開く事
- 一 函港より札幌まで所謂北海道五十驛程を開き旅亭を盛んに造る事
- 一 清國の旅館を築かしむる事
- 一 各國商館を置く事
- 一 各國應接所を置く事
- 一 製鐵所造船所を開く事
- 一 蒸氣器械を以て諸器諸品を製造する事
- 一 海陸練軍所を置く事
- 一 開拓の順序大綱既に定まれば斷然 親臨以て開拓するの 叡旨を天下に示すへし其 親臨時日の如きは 先づ豫め歳月を期し大に開拓使に任し宜しく期を誤らす奏功せしむべき事
- 一 歲月期限の如きは來未年より三ヶ年を以てすへし四年目に至り戊の年

正月末より二月初に東京 發輩の事

一北海道へ 親臨は奥州路より津輕に至り大艦にて函港に達し兼る新に開く所の五十驛程を経て札幌に 着輩所謂北京を置き同く八月東京へ還幸之事

一札幌へ 行幸既に北京を置けば則更に北京府知事參事各其職員を置き於是開拓使を廢する事

一北京府を置けば則函館縣を置くべき事

右開拓の大綱にして概略の目的也若し夫れ此際に區々紛々雜出する者は細目にして苦慮するに定らす唯此の大綱を擧ぐるの巨眼を張らしめん事を仰望する而已

正月廿二日

大橋開拓權判官 源 慎

岩倉様殿下

## 六 大橋慎建言書

岩倉具視宛 明治三年正月廿六日

樺太州之論

臣慎謹而惟るに北海道十一州開拓の急務たる所以んは既に上言する如し然るに樺太州も亦其地脈自然 皇國の版圖に在り而して 皇澤未た及はさるの間漸く鄂羅の有とならんとす故に議論紛々或は以爲へらく鄂羅の形勢恐らくは遂に當るへからず其豪奪を待んより如かす我れ先んして之れを彼れに賣らんには之れを彼れに賣れば則我れ立ところに千萬以上の金を得ん之れを以て北海道に用ひは大に開拓の基礎を立るに足ると或は以爲へらく今外務開拓の職員出張して鄂羅の開拓する勢ひに向ふ事所謂大厦の覆らんとするに當り一木を以て支へんとするか如し徒に數十萬金を費すのみ若かす職員の費へを省き彼の地を度外に置き敢て關する事無からんにはと臣以爲へらく二説皆非也

陛下必ず別に深淵の英斷する事有らん政府必ず別に確議を 奏する事有

らん樺太決る不可賣決る度外に置くへからず夫れ鄂羅の志たるや素より小ならず必ず遠大不急細亞洲を併せて以て一政府とし且各國を壓せんと欲する也樺太の如き豈に我れの賣るを待て後買ふの愚なる事を爲さんや固り將に一金を我れに費さすして已れの有とせんと欲する者也然るを今我れ之れを彼れに賣らんとせば則實に鄂羅の笑ひを免れず之れを皇國の大耻にあらずと云とも臣未だ信する事能はず嗟哉 皇國の士民管見淺慮多く姑息苟安に狃れ遂に深遠の大策に乏し臣曾て竊に 皇國の爲め之れを各國に耻つ且夫れ古より割地賣國の説を唱へて國を誤らざる者は未だ之れ有らず故に社稷の臣たる者固り以て唱へざる也英雄豪傑固り以て耻る所也然れば則樺太の如きは今日の如くにして可ならんか將た今日に倍し盛んに職員を出張せしめ以て數十萬金を費し鄂羅に相抗して以て開拓すへきかと云は、則又非也臣以爲へらく宜しく以樺太藩を置くへき也其知事は乃ち閩藩の知事を精撰し凡そ高五十萬石二ツ半免にて可也但し大凡現米十萬石金にて

は九十萬兩に轉封し永世下し賜ふとすへし其土地の經界は鄂羅と應接し十分に分力らを伸ふるを以て可とする也而して其舊藩は乃ち縣とし大藏省出張して其遺民を撫育し更に制度を立て此の縣をして専ら樺太藩の入費に供し貨殖商法を勉勵せしむへし夫れ斯くの如くなれば則他年必ず 皇國に益あらん往年豊臣秀吉海内多事の時に當り蝦夷地を松前に委任し斷として顧慮する事なし専ら力らを 先務に盡し以て閩國を一定し遂に朝鮮を征するに至れり今や 皇國最盡すへきの先務固り多し宜しく樺太藩に委任する事猶秀吉の松前に於けるか如くすへし若し夫れ他日鄂羅を壓倒し遂に樺太全州を領し以て山靺滿州に及ぶは唯知事の賢愚に依て成否有らん而已若し其の隙を開くか如きは乃一藩斃れて已むへし聊 皇國に連累なきを期する事猶先年長州の各國を馬關に引受け戰ふて聊 皇國に連累なきか如くすへし蓋し 皇國の臣子たる者善行美事は盡く之れを 朝廷に歸し以て 朝廷の善行美事とすへし縦ひ己れの功勞多しと雖決る己

れの功とすへからず偏へに以て 朝廷の功とすへし若し夫れ罪惡過失に至ては盡く之れを 己れに歸し決り 朝廷に歸すへからず宜しく一身を碎き一家を滅して已むへし是れ固り臣子の常職也何ぞ論を待たん 然と雖樺太に藩屏の重任を奉する者に至ては其豪邁大節所謂百挫千折すと雖屈せざる者にあらざれば豈に能く大事を成すを得んや唯 陛下の人物を精撰するに在る而已誠恐誠惶再拜稽首謹白

正月念六

慎

七 三條實美書翰

岩倉具視宛 明治三年正月廿六日

御安全珍重存候抑過日來は遅々不參何共恐入候以御憐恕病氣保養家事をも相辨奉萬謝候扱方今東西之形勢を察視仕候處愚案には實に不容易御場合復古之事業成否は此三四五ヶ月の間に可有之真に臣子死力を竭すの時と奉存候幸にして此險難を凌ぎ候は、却る雨降地固の譬への如く天下平

定之時に可至然れば今より暫之際神州の安危浮沈の機ならん歟彼是御熟談申度件々有之候間明朝は九字より御早參無御差支候は、相願度候先右御尋申度勿々如此候也

正月廿六日

實 美

岩 倉 殿

緘

八 蜂須賀茂韶書翰

岩倉具視宛 明治三年二月十一日

拜啓仕候逐日春暖相催候處先以 聖上益御機嫌克御同意奉恐悅候隨り 盟臺愈御多祥被成御奉務奉萬賀候 毎々御多忙中汚 貴覽候得共愚忠難默別楮一冊 盟臺座下迄呈上仕候何 卒 御廟議之一端に爲加候者大幸此事に御坐候外夷御交際之上に就るは尤當

今之御一大事と奉存殊に教法は人道に關係仕候事故急度御應接振も有之  
 度義と奉存候元來國法は萬國各其土地人情に應し適宜之法も有之事故  
 皇國御法制等今一層嚴重に御確立被遊彼をして是を守らしめ  
 皇威普く海外に被爲 輝候様有之度尙委細は別紙に御承知可被降候先  
 日井上參事を以粗申陳候次第も有之故貴答も同人を拜承候事には候得共  
 兎角老婆心難留宜 御取捨可被降候  
 一供連之御取究之件聊心付候儘是又別紙備 貴覽候

右は臆見而已之事に疾

朝議も被爲 遂候御義も可有之候得共先後を不顧杞憂之餘申陳候御官

暇御一覽奉希候草略頓首再拜

二月十一日

茂 韶

岩 倉 盟 臺

坐下

二伸 爲國御自愛奉專禱候耶蘇教小生在職中も度々御評議も有之候事  
 にも又無餘義御情實御坐候とは奉存候得共今一層手強き御應接振も有  
 之度本文認候條如此に御座候以上

九 岩倉具視書翰吉井幸輔宛 明治三年二月十四日

今朝御返書之趣何も令承知候別紙之通兵部省より申越候間内々御廻し申  
 入候足下限能々御堅考にて明日十字或は一字之内に御參  
 朝御別席御談申度候猶亦其節内田伊集院兩士之義必御内決御答承り度候  
 此義は足下御他出彼是小生存込候次第も候に付吳々速に御決定承り度存  
 候早々如斯御座候也

二月十四日

具 視

吉井彈正少弼殿



一〇 岩倉具視書翰〔黒田清綱宛〕 明治三年二月廿二日

前略過日來御内談賞典位錄返獻云々今一應示談申入度乍御苦勞明早朝鳥渡來會有之度存候仍早々如此候也

二月廿二日

岩倉大納言

薩州邸

黒田嘉納殿

早々要用

一一 岩倉具視書翰〔佐々木高行宛〕 明治三年二月廿六日

過日態々來臨御苦勞其砌覺箇條書尤細少の事も有之不可論事も候得共宜敷御取捨一書に御認給り小生分は悉く御返し可給候尙亦卒爾に愚考件々申入如何に候得共かねて御咄申合候末打明申試候事に候條必々御莫言可給候今日は條公へ出願御同様内談之心得に候其上今明日の中副島へも談

し試夫より廣澤示談と存候返す々々今一應申入候迄は御一人限り極御内々頼存候早々以上

二 廿六

追て尙亦覺箇條差出候間宜敷御取調可給候昨日も早出恐入候今日も大分不工合困入候何卒條公へ出頭致し度ものと存居候早々以上

佐々木參議殿

具 視

一二 岩倉具視書翰〔天久保利通宛〕 明治三年三月二日

春暖之砌益御機嫌能被爲涉御同然奉謹賀候中宮御方にも御同様總而御平穩候間御安心之様存候隨而共御父子卿にも彌御安泰御奉職欣然候貴所にも御壯健御滞在珍重存候小生にも無事勤仕候間乍憚御放念可給候一先日備後殿御兄弟寛晤其砌御傳言次第尙亦小生書狀御一見被下候事と存候長州變動實に意外之儀於當府中も一時は種々之風聞附而は議論不

少彼是苦心候得共速に鎮定先々安心候則爲宣撫使徳大寺卿土方中辨吉井少弼等被差立候二月十九日品海揚錨之處於兵庫表最早戰爭相濟平定相成候由承知被致候得共前議之通山口參向暫時之間滞在當月五日六日頃には復命候哉之旨に候西郷氏早速馬關出張之由不相替御進退感喜此事候

一東西京共先々無事草莽云々風聞も候得共格別之事無之旨に候貧民之處は何れも苦心罷在候得共凶年之末如何とも致方無之候併今日之處に而は強而之事も無之候總體表面之處は平穩に候得共内外議論多く殊に民藏物議不少是計は頗掛念候

一兩國兩老卿西郷氏足下木戸等出府之事屈指御待申居候實は副島等と申談大事何分御出府之上と相心得日々小事而已運ひ罷在候仕合深御推察吳々早々復命有之度候西郷氏出府如何に候哉素より御骨折とは存候得共益天下人望之歸する所に候得は一度は是非廟堂上に御立に相成候様

血泣懇禱仕候

一條公始百官何れも無事今日迄は一向替り候事も無之候先日は副島へ御書一見西京彈府止刑始末長州隊卒混雜一件至る所大事出來御困り有之由扱々氣之毒令遠察候止刑一件も此頃刑官に而取調中に候存外輕律哉の旨内々傳聞候

一各國耶蘇談判も格別之事無之粗相濟申候

一足下には尤無御如才存候得共諸君子と御出府之事勿論と存候心二月中と御沙汰候へ共何分御兩所前條之通手間取候に付三月上旬中には必々御出府と存候へ共能き便宜有之候旨黒田より承候に付行違可相成哉と存候得共一筆申入候

一兵部省之事も元より御大事勝も御催促相成申候黒田にも尤足下同斷歸府之事と存候

一黒田嘉納御使一件彼是苦心候得共先々即時は御申立之通相成候乍去是

は御出府の上厚く御談申度存候  
右早々如此候也

三月二日

具 視

參議大久保殿

尙々副島不相替心配勵勤候併此頃は少々持病氣に候尤當分之事候也

一三 岩倉具視書翰「黒田清綱宛」 明治三年三月四日

前略兼御内談一件過日申入候二日御尋之上御沙汰可相成之所公用人一  
應引取返答之趣に同日夕方更に返答に付今日之御運ひに相成候尤始終  
はかね申述候通に付御安心之様と存候大久保氏之書狀其藩邸に頼候  
所去月十五日發足無相違旨彌右之通り候は、山口に於隙取候哉と存候に  
付御序に御返し可給候將此間出會くる島藩士今井某歸國迄一應出會申度  
明早朝入來之様乍御面働御傳頼存候早々如此候也

三月四日

具 視

黒田嘉納殿

不勞貴答

一四 岩倉具視書翰「佐々木高行宛」 明治三年三月五日

別紙虚説とのみ輕悔ならずや古賀十郎の所素より異聞も有之候故今度免  
職に至り候はゞ右徒如何の手段可有之も計り難からん此處は足下深く盡  
力此黨に一人の人物ひとと振はまり始終未發にふせぐの策あらまほし別  
段出會殊更に御談し申度存候日々延引候何卒々々出格御配慮有之度存候  
早々以上

三五

具 視

佐々木殿

極々秘々

一五 岩倉具視書翰「佐々木高行宛」 明治三年三月六日

前略昨日卒爾に入内覽候一書必々他見無用堅固約定一事に候得共足下限り一覽頼存候次第は鳥渡書取候筋なり素より虚説不可論と雖も亦傍ら長人の爲め聊懸念なき能はず尤 朝廷御爲は申迄なし旁御舊藩にて一人の男子御見立宜敷御申含めかねて振はまり苦心の人も候はゞ決して何事なく可相濟且無智の者も罪せず平穩ならんか偏に恐怖心の甚敷と御推察哉と赤面の事に候得共此處は分て御内談申入候將明日は小生には不行向參朝の心得に候條公に退出懸り申入存候處誰か談し申定て貴所より御申入置被下候事と存候

三六

七日第十字 延遠館 食事出るなり

刑官 卿輔丞 三人

集議 卿判官 四人

臺 未相分らず

任序爲念申入候也

具 視

參議 佐々木殿

一六 岩倉具視書翰「佐々木高行宛」 明治三年三月六日

一 此書亦論するに足らず例の誤傳のみ且此書をなす人長人を怨る者也決して引當にならず然れども草莽には知己多し千言悉く虚とは申難し  
一 予竊に愚慮候處長州脱人云々なしとも申難からんか加ふるに之を頻りに動す草莽の者あらんか此所は極々秘にして吳々御盡力有之度存候  
一 御同列へも決して御漏洩無之様と存候將亦今度長より藩政不行届より全く云々の次第に立至り候と一言進退伺の次第に相成候得は他日の議論

も有之間敷と存居候處昨日廣澤氏口氣に何れ進退可伺との云々あり大に安心也此所は始めより御約の通りにて御互に内外なく只々至誠一途爲 朝廷百方盡すの外なくと存候齋藤氏には御計り給候て可然存候一自今前途目的いかんと云々緩猛開國聖賢云々つまり兩端なり實に苦慮極る也是非々々一途に不出候ては萬不成と存候兼て密話申入候次第も御熟考可被下大久保も二月十五日日本國出帆山口に立寄候との事必不日德卿等と同時に歸府候哉と存候其上大に御盡力可給候様吳々も懇願の事に候右早々以上

三六

今朝御返事正に入手候一昨日秘書今日分共に明後日御返し可給候別紙御傳覽今日中兩氏の中へ御廻し置可給候副氏へ御廻し被下候はゞ重疊也不參の時の用意なり

具 視

佐々木參議殿

内秘啓

一七 岩倉具視書翰〔佐々木高行宛〕 明治三年三月七日

兵部省伺事件明日は御評議有之度に付第八字より御參可給候早々以上

三七

追て昨夕書狀西京分共定て御入手と存候然るに今日廣澤不知との事に候也

具 視

佐々木參議殿

一八 岩倉具視書翰〔黒田清綱宛〕 明治三年三月廿日

御壯健欣然候然は卒爾之事に候得共若し此比御歸國等之義も候は、前廣

に必爲御知可給候右は御用筋有之候に付先從小生不取敢此段申入置候事に候早々以上

三 廿日

具 視

黒田嘉納殿

一九 岩倉具視書翰「大久保利通宛」 明治三年三月廿九日

前略今日は不參恐入候格別之事も無之候得共兎角頭痛困苦時宜に不明日不參も難計候御合置可給候

一 吉井得能林等の事昨夕宇和島入來大隈伊藤何れも更に異存なく昨日御心附前以申入候亦大に都合能候也只林得能の所少丞を被仰付候は、重疊との事に候定亦條公を御聞と存候

一 木戸後藤の處小生には追々勘考候處此上盡力至誠貫通御見込恐くは不可有疑か左候得は今度は斷然三木被仰付候方急渡可然存候副氏素り必

用不可欠人體逆退杯被申候も所詮不行事に付同氏得意承知被致候様偏に御頼申入候若し此體に空敷時日を送り候亦は又々誰々云々の論に兎角と異論起り候得は實に苦心候今度一洗凡る復舊同心戮力は則御一新の事大になるの基と存候吳々宜敷御配慮可給候萬一不被行候へは乍殘心足下俱に待詔の外なしと心得候事に候亦小生にも御加へ被下候へはいか計畏存候事に候昨日も御中坐中佐々木にも右兩人の所よはと苦心之様子に候

一 昨日も卒爾救民愚意申述如何と恐怖候得其實に不成を頼むなかれに萬一も麥作いかんと見候へは 至尊御始め百官非常の御處置被爲有何を起すも建るも悉皆御取留全國餓死なき所に一途御目的無之は御一新の事も畫餅に至らんかと眞に雨天に懸念不安心地候何卒今を厚く御勘考に誓て此民を救ふの良策あらまほしく存候

一 吉井得能にも彌御請申候哉御内談に爲御聞頼存候林にも如何と存居

候様子吉井御請と申事に候へは同人にも定む御請可申哉と推察候事に候

一 上野敬介の事兼々民大省より頻りに懇願候に付此分明日に亦も辨官の御下知外務の御沙汰止申傳へ民大省の渡し候運の事宜敷御頼申入候一節朔參 賀八字より參 朝九字には必相濟候事に御治定若し御承知無之かと爲念申入置候

三 廿九

具 視

大久保參議殿

内啓

尙々本文存附之儘六さと書付不都合之事も可有之候得共内々貴所限り申入候御一覽火中頼存候也

二〇 岩倉具視書翰

佐々木高行宛 明治三年三月廿九日

今日是不參御用繁中無申條候扱御約定袍<sup>夏</sup>二領此分足下前原等へ進上の心得何れにても御好次第御留置可給候終には夏冬御拵無之ては不相濟と存候得共御同列何れも當分は何れにても夏冬御兼帶かと存居候處貴所へは始より進上の心得に付實に御都合次第御入手可給候也

三 廿九

具 視

佐々木參議殿

不勞貴答

二一 三條實美書翰

岩倉具視宛 明治三年四月七日

内密御談申候餘之儀にも無之西京之事情留守京府云々宮内華族等之情態も彼是御懸念之通之形勢にも有之就るは何れ一掃除御所置も無之るは始終之居合如何可有之哉左候は是非納言之御内にては御出張にて處分無之るは治りも付不申歟と存候然に小生内願之次第有之是は頗私情にて甚

不相濟儀にも存候得共親子之情にて頻に心情難默止候間先貴兄限不願憚申試候乍併所詮不被行事を強ち申立候様に相成候は恐懼之至に存候何分宜御諒察願度候其子細は小生一老母有之癸亥已來離別幸に天朝之渥恩に依る丁卯之冬歸朝再會を得臣生涯之遺憾も無之候乍去歸京之後東西奔走膝下に終日之侍養も不仕昨春來も頻に西歸を渴望仕候處當年之還幸も御延引に相成大に力を落し申候情實加之昨冬來餘程大病にて漸此頃に至り先快復仕候最早極老年にも相成何時も知れ不申事に付願くは唯今之内一度歸省一面會仕度且小生は東京住居と相決し舉家此地に相移し候に付家内之處も改革仕世上之形勢も不相心得將老人之事故落膽罷仕候次第に付一度面會も相叶候は、篤と納得仕候様安心爲致度旁私情而已にて頗御嘶申候も愧入候得共人情は陳情表にも有之候通天地間に不可逃者御憐笑可給候扱公事に托して私事を營候様に相當り如何敷候得共前文申陳候通西京云々之形勢に付は小生相願一應歸京被仰付凡往來日候は、京攝

之形勢兩地諸官諸局をも觀察仕候時宜により見込をも相付御處置にも相成候は、可然候半歎小生元より不肖乍今日之職に在之候上は奉代至尊京攝之治否を相察し候事當然之職務とも存候先達大久保參議をも申候通一步を踏出し實地に臨み候得は大に相變り候物に御座候實に西京は本都今日之形勢等閑に仕候ては決ち不相濟屹度御取締且人心をも御懷け無之は御不爲と相考候就は還幸も御延引に相成候得は時々御互に交替して年に一兩度は往來仕候へは大に情實も相通し人心にも朝廷上の御厚意を感戴仕候場も可有之と存候前條之趣意公私混淆之様に如何敷可被思召憚入候得共愚意之儘内々申陳候條不惡御聞取御賢斷被成下候様奉懇願候日々拜眉を得候へ共御互に多忙寛談之隙無之候故書面を以て申述候書不盡意候尙拜上委曲可申上候得共不取敢大概申陳候宜御推讀御高評奉願度不堪懇祈候謹言

四月七日

實美



巖倉亞相明公

二二 宇田淵書翰〔岩倉具視宛〕 明治三年四月八日

謹啓

清和之好時節に御座候處閣下益御勝常不相變御勉勵御奉職可被遊上爲  
至尊下蒼生恭賀不過之奉存候

扱過日

還幸御延引御布告文之事且地子免除并御下け金之等之事段々御配慮を以  
何れも程能相運ひ臣に於ても實に難有次第に奉存候其後御届も申上候通  
府下市民説諭等も先行届地子免除御下け金等之事は何れも難有存居候趣  
にて

還幸御延引に就て民心沸騰と申氣味は先々無之御安心被遊候様所希候  
○當月朔日府中之官員一同河東練兵場に於て皇居を遙拜して

天恩を謝し奉り加茂兩社へ詣して神恩を謝し申候且府下之民人も當日  
より三日之間參拜を差許し候處何れも參詣致し候趣に右參拜差許し  
候就ては萬一新に衣服を製し華麗を競ひ驕奢ケ間敷事に立至り候ては  
不相濟義と存心得違ひ無之様再度布告致し置候處夫故に哉格別之事も  
無之頗る其體戴を得て至極妙に御座候鳩居堂之組町之由

天 有 恩

地 無 稅

と申文字有之幟を立罷出候是等尤面白く覺申候服は大抵常之服にて罷  
出候祇園町のみは男子ふくりん之武先羽織女子木綿之反故染位ひ之事  
にて是等は場所柄之事殊に右地子免除は格別難有存居候所故右等は可  
恕事と存候尤三日之内繰合せ職業差支に不相成様致し參拜致し候義は  
勝手にて連日其業を廢し必參詣可致との趣意にては無之趣再度之布告  
も有之候故連日業を廢し候様之者も無之趣にて先大に安心仕候

○過日長官卿より柴田へ御托しにて御申入に相成私よりも申上置候一件何卒至急御決議相成候様奉希候留守官府中に被建置候ては實に廉々不都合之義有之是は實地を目撃致し候人は不待識者して其不可なる事を知申候に御座候是非元の如く禁中に被置不申候ては不叶義と奉存候且留守官宮内省と合併之事是は少々御六ヶ敷事歟と奉恐察候へ共右様相成候は、實に御便利にて且御用度も餘程相省け可申實地御都合よろしき義と奉存候長官卿も右御申立に就ては餘程御決心之御様子若御採用無之於てはとて留守難相勤留守は留守之者は是ならば相勤可申と申見込之通御聞届に不相成候ては不叶義との御尊に御座候此邊御含にて何分御盡力奉希候

頃日府は知事下參事在職之儘謹慎被仰付候由承り申候右は定て其内西歸に相成可申と存難有次第に候就ては榎村も同様謹慎致し居候へ共日限相濟候は、出仕可被仰付夫に付臣は兼て粗其情實も言上致し置

候通り何卒免職相成候様御配慮奉希候尤右兼職辭退之表は過日辨官へ差出し置申候河田氏も情實は兼て被申上置候次第に御座候間是も辭表差出し可申由に候乍去臣と違ひ河田は大參事本官之事故右辭表にも本官被免兼職留守判官のみに被仰付度とも難申と先兩職共辭し奉り候趣に御座候此邊御含被遊可然御配慮奉希候

○前文長官卿御申立之義も今度府之模様右之次第に有之且宮内省も烏丸卿御東下中故旁以好機會と奉存候何分御盡力可被成下候右邊之事も決り長官卿一己之私情を以被仰置候譯にては無之實に爲國家御體裁もよく御便利にも可有之處を御謀り被遊候次第に御座候此末

御還幸も何れ之年を期し可申哉就ては留守も前途猶遠き事故右御申立之通被仰付無之ては旁以御不便に可有之と奉存候御模様度々變換致し候義は實に不好次第に候へ共其不可なるを御承知被遊なから強て非を御遂被遊後日に至り不得止御改に相成候よりは此好機會を不失御不都

合出來不致内に斷然御改に相成候方可然と奉存候乍恐此段不憚忌諱申  
上候稽首再拜

四月八日

淵

亞相公閣下

二三 大橋慎建言書〔岩倉具視宛〕 明治三年四月十二日

開拓人才御見込被爲在候趣何卒急々其人才を次官に而も判官に而も御備  
へ被 仰付度奉存候事  
一 開拓之義は遂に民部合併を以て上策と可仕奉存候事  
一堂々たる開拓使之名其れ斯くの如し而して其實何分舉り難し抑非常之  
大業を興さんとして尋常之人に尋常之行ひを成さしめ尋常を減するの  
金穀を與へ以て神速の大功を責んと欲するは惑也今三五年後に凡そ蒼  
生繁殖荒蕪開拓其れ斯くの如きに至ると云ふ定算なき如きにては豈に

成功を期するを得んや今の開拓使逆も大功を期し難し不若々々民部に  
合併するに 殿下其れ熟慮可被爲在奉存候事

四月十二日

慎

二四 宇田淵書翰〔岩倉具視宛〕 明治三年四月十三日

謹啓過日より内々申立に相成居候留守官府と之合併御解放之事申立通御  
採用に可相成哉之御模様近日吉井監督正上京にて内々承知仕候就ては河  
田并私共も府之職務は御免に相成候様偏に奉希候乍去長官卿事務御取扱  
之義は是非是迄之運被 仰付置度奉懇祈候萬一長官卿御取扱迄被免候様  
にては是亦大に御都合にて此末又々舊冬斷刑延引の如き事件出來可仕  
哉も難計と御案し申上候間是丈けは是非元の如く被 仰付置候様仕度候  
右事務取扱は被免別段之 御沙汰を以府も留守官之管轄抔と申様之御評  
議も或は可被在哉とも奉恐察候得共七人のみにては中々行届不申萬事に

付不都合も可有之と存候間必々元の如く被仰付置候様奉祈候瑣屑之事は御關係に不及候得共大事件は知府事之上に在て御決斷に相成候は、至極妙にて畢竟爲朝廷御都合と奉存候何分御熟議所希候過日も内々申上置候通河田義は兩職共辭し申趣表にも相認差出候得共其情實是迄之兼職留守判官のみに被仰付候は、難有御請可申上趣に候兵部大丞に復職可被仰付御評議も被爲在候哉にも奉恐察得共同人今日之情實にては兵部之方は大に困却可仕と被察候其次第は頃日大坂出張之兵部省抔洋癖如何にも甚敷恣に脱刀して他出致しビイドロ障子椅子に靠り候抔は申迄も無之一同之模様少し志有之者は實に長太息之外無之由藤村四郎抔も逆も此末兵部之勤仕は見込無之獨力衆議を排する事不能に付本官を辭し可申趣内々申居候右之次第に候間河田抔は猶更にて決して再ひ兵部之出仕は不欲趣に候但し其懷實何卒當地に於て御奉公相勤申度東下之儀は可相成は御免を蒙り度由内々申居候次第にて右之通御含被遊可然御配慮奉希候當

官宮内省合併之事も長官御御噂にて是非申立通被仰付候様致し度との御事にて過日も申上候通り右合併御沙汰に相成候は、多少之人員も御減少にてよろしく御費用も餘程相省け七人社實地御便利と相考申候是亦何卒御申立通り御沙汰に相成候様御盡力奉希候稽首再拜

四月十三日

淵

岩倉亞相公閣下

二五 岩倉具視書翰「大久保利通宛」明治三年四月廿日

御報一見

○黒田一條何も承候

○民部卿始め 召の事明日條亭行向同所を辨官迄申遣候廿二日早參直に召之事取計可申遣存候

●此事見損し不都合辨官へ御申置の事承候